

30年を超え紡いできた問いを、未来へ向かうチカラに

Memorial
Conference
in KOBE

BEYOND30+ | 2026

Contents 目次

ポスト災害メモリアルアクション KOBE ワークショップ

令和7年10月18日(土)開催

「これから何する？」ワークショップ進め方	01
ワークショップ① 各団体、これから何する？	02
ワークショップ② みんな、このプロジェクト これから何する？ 名称どうする？	04
アンケート結果	05

BEYOND30+ 2026 大交流会

令和8年1月10日(土)開催

開会のあいさつ	07
企画趣旨説明	09
活動紹介セッション	13
出展団体 (14 団体)	
① 兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康類型	13
② TEAM-3A	14
③ 関西大学社会安全学部 奥村研究室	15
④ 防災世界子ども会議実行委員会 /NPO 法人 JEARIN	16
⑤ KiDS(Kyoto & Kansai University Disaster prevention School)	17
⑥ 株式会社防災アプローチ	18
⑦ NPO 法人 松山さかのうえ日本語学校・京都大学防災研究所	19
⑧ 国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (明石高専防災団)	20
⑨ 神戸市立工業高等専門学校 EC3	21
⑩ 兵庫県立大学 学生災害復興支援団体 LAN	22
⑪ 兵庫県立舞子高等学校	23
⑫ 帝京大学 社会安全技術研究室	24
⑬ U35 防災ゼミ	25
⑭ 神戸市立福田中学校	26
パネルディスカッション	27
大切にしたい言葉 (学生、学生以外)	44
BEYOND 宣言 (学生、学生以外)	46
閉会のあいさつ	48
アンケート結果	49
チラシ	52
委員名簿	53
当日の写真	54



Memorial
Conference
in KOBE

Workshop

ポスト災害メモリアルアクション KOBE ワークショップ

「これから何する？」 ワークショップ

〈企画実行委員以外の参加者所属団体〉

国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (地域連携)

国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (開発)

兵庫県立尼崎小田高等学校

KiDS (関西大学)

TEAM-3A

兵庫県立大学

兵庫県立舞子高等学校

※五十音順

日時

10月18日(土) 13:00~15:00

内容

- ・奥村委員長挨拶・趣旨説明
- ・ワークショップ
- ・グループ発表
- ・講評

場所

国際健康開発センター(IHD)ビル3階
31A~C会議室

ワークショップグループタイトルと発表者

- 1班 「次世代への継承方法(ぼうさい絵本)」
発表者: 人と防災未来センター 具 研究員
- 2班 「ゲリラ豪雨マスターになろう!」
発表者: 人と防災未来センター 黒田 研究員
- 3班 「デザインから見た防災」
発表者: NPO 法人防災デザイン研究会(株式会社 GK 京都) ト部委員
- 4班 「『REC KOBE』プロジェクトの紹介」
発表者: ラジオ関西 西口委員
- 5班 「震災体験インタビューの内容と、防災カレンダーの進捗状況発表」
発表者: 兵庫県立舞子高等学校生徒
- 6班 「今後の本校の取り組みの方向性について」
発表者: 兵庫県立尼崎小田高等学校生徒
- 7班 「地域のユース世代による地域防災の実現に向けて」
発表者: TEAM-3A

「これから何する？」ワークショップ 進め方

1. ワークショップの趣旨

これから10年間何する?という視点で、参加学校の学生さんや、企画委員、社会人も交えて、設定するテーマを手掛かりに、各団体の取り組みや本プロジェクト「(仮称)ポスト災害メモリアルアクション KOBE」について、意見を出し合い、これからどのように進んでいくかを考える。

2. ワークショップ① 各団体、これから何する? (70分)

【概要】受付でくじ引きにより指定されたグループの席に座る。全体での趣旨説明後、グループごとに各団体の活動の説明を聞き、テーマを参考に「各団体、これから何する?」という観点でアイデアなどを付箋に貼り出して、意見交換を行う。

【タイムスケジュール】

STEP	活動	時間	内容
1	趣旨と進め方説明	5分	企画の目的と進め方を説明する。【全体】
2	各活動の説明	15分	各団体が取り組んできた活動について説明する。【各グループ】
3	アイデア出し	15分	各グループのテーブルにある模造紙に、STEP2で聞いた各活動に対するアイデアなどを付箋に自由に書いて、貼り付ける。その後、出されたアイデアについて、意見交換を行う。【各グループ】
4	各グループ発表	5分×7班	団体の代表者が、模造紙に貼り付けられたコメントなどをもとに、意見交換の内容を説明する。【全体】

3. ワークショップ② みんな、このプロジェクト これから何する? 名称どうする? (40分)

【概要】趣旨説明後、「みんな、このプロジェクト、これから何する? 名称どうする?」という観点で、各自アイデア出しを行い、グループごとに模造紙に貼り付けてアイデアを共有する。

【タイムスケジュール】

STEP	活動	時間	内容
1	趣旨と進め方説明	10分	企画の目的と「なぜ名称をみんなで考えるのか」、進め方を説明する。企画委員のメモリアルアクションにかける思いを表明する(1人30秒トーク)。【全体】
2	アイデア出し	10分	付箋に自由に、名称案やキーワードを書いてもらい整理の観点(例:「未来志向」「つなぐ」「挑戦」「メモリアル」)を記載した模造紙に貼り付ける。【各グループ】
3	共有とグループ化	10分	似ているものをグループ化し、キーワードのまとまりごとに整理・集約を行う。【各グループ】
4	全体振り返り	10分	各グループの成果物や議論を踏まえ、奥村先生・中野先生からコメントをいただく。【全体】

ワークショップ① 各団体、これから何する？

奥村先生より趣旨説明

阪神・淡路大震災から30年が経過し、若い世代にとっては生まれる前の出来事ですが、現在の暮らしに大きな影響を与えています。これまでの10年間は若い世代の活動に注目してきましたが、今後は若者の可能性と阪神・淡路大震災を経験したまちの将来の歩みについて考えていきたい。

阪神・淡路大震災と向き合いながら、自分たちが夢中になっていることとどのように結びつけられるかを考え、10年後を想像することは難しいかもしれませんが、まずは今年の取り組みから始め、若い世代と大人世代が意見を交換し合うことが重要です。

これから
10年間
何する？



松村研究員からワークショップの進め方について説明

各団体の活動説明(15分)、アイデア出し(15分)の順で進行し、学生は黄色の付箋、大人はピンク色の付箋を用いて、各グループに用意されているホワイトボードに意見を貼っていきます。

各グループ発表

団体の代表者が、模造紙に貼り付けられたコメントなどをもとに、意見交換の内容を発表した。

1班 「次世代への継承方法（ぼうさい絵本）」

発表者：人と防災未来センター 具研究員

防災えほんチームは、絵本のPRと絵本自体の改善という2つの方向性について発表しました。PRアイデアとしては、TikTokや声優による読み聞かせをYouTubeで配信すること、電子出版や学校図書館への導入、病院の待ち時間に読んでもらうこと、PDFファイルとして無料配信することなどが提案されました。絵本自体の改善としては、文字数を減らすこと、立体的な要素を取り入れること、海外向けの翻訳版を作ることなどが挙げられました。



2班 「ゲリラ豪雨マスターになろう！」

発表者：人と防災未来センター 黒田研究員

気象関係チームは、積乱雲やゲリラ豪雨に関する模型を使ったゲームについて紹介しました。黒い雲の模型を実際に使用し、イラストを用いた地図や被害の説明を行うことで、わかりやすく伝える工夫をしているとのことでした。参加者からは、ゲームの目的をしっかりと説明することや、どのような被害が出るかを考えてもらうことなどの提案がありました。



3班 「デザインから見た防災」

発表者：NPO法人防災デザイン研究会(株式会社GK京都) 卜部委員

GK京都は、デザイン会社として防災デザインに取り組んでいることを紹介しました。阪神・淡路大震災の翌年に提案したコミュニティキャンプや、防災ピクトグラムの開発などの事例が共有されました。デザインとは想いを言葉や色、形に変換してメッセージを伝え提案する活動であり、自分たちの想いを形にして人に見せることができると説明されました。



4班 「『REC KOBE』プロジェクトの紹介」

発表者：ラジオ関西 西口委員

ラジオ関西は、阪神・淡路大震災 30年に向けて「REC 神戸」というプロジェクトについて説明しました。兵庫県の2つのラジオ局が協力し、震災の記憶を持つ人々へのインタビューを Podcast などで配信する取り組みです。現在 32 人の声を録音しており、今後も継続していく予定とのことでした。参加者からは、ポジティブな側面に偏りすぎていないかという指摘もあり、今後の活動に活かしていきたいと述べられました。



5班 「震災体験インタビューの内容と、防災カレンダーの進捗状況発表」

発表者：兵庫県立舞子高等学校生徒

舞子高校は、新任教員への震災インタビューと防災知識をカレンダーにまとめる活動について発表しました。活動の目的を細分化し、ターゲットを明確にすることの重要性が指摘されました。具体的な提案として、YouTube のショート動画の活用や QR コードの掲載、地域の協賛者への配布などが挙げられました。また、災害時の困りごとをカレンダーにまとめ、見た人に考えてもらうアプローチも提案されました。



6班 「今後の本校の取り組みの方向性について」

発表者：兵庫県立尼崎小田高等学校生徒

尼崎小田高校は、10年続けてきた防災活動の今後の方向性について相談しました。参加者からは、学校ならではの強みを活かした活動（劇や地域交流など）を展開することや、先輩から学んだことを次世代につなげていくことの大切さが指摘されました。



7班 「地域のユース世代による地域防災の実現に向けて」

発表者：TEAM-3A

TEAM-3Aは、「いつでもどこでもだれでも」をコンセプトに地域とのつながりを重視した活動を紹介しました。土手の花見の由来を挙げ、地域の人々のつながりが防災につながることを説明しました。まちづくり協議会と協力し、盆踊りなどのイベントに若者も参加できるような工夫や、防災ブースの設置などを計画しているとのことでした。参加者からは、子供会などとの協力や体験型の遊びの導入、踊りが苦手な人でも楽しめるアプローチの検討などが提案されました。



ワークショップ② みんな、このプロジェクト これから何する？ 名称どうする？

— 各グループからの意見 —

1班

過去の記憶よりも未来や新世代を重視し、
30年という節目にとらわれず先を見据えた活動を提案

2班

「RE KOBE」（神戸の観光地「BE KOBE」とかけた造語）や SNSハッシュタグの
活用など、現代的なアプローチを検討

3班

「Not 防災」という概念で、
従来の防災イメージを変革し若い世代にアプローチする提案

4班

- ・参加者への問いかけ形式のメッセージを重視
- ・「ハイタッチ」をキーワードに、神戸マラソンでの体験から人とのつながりを表現
- ・グローバルな視点での展開を提案

5班

「何も思いつかない」から始まり、「ネクスト」と「コネクト」を
組み合わせた造語を提案

6班

タイトルを「白紙」とし、多様な参加者で後から決定することを提案

7班

10年単位での時代に応じたテーマ設定を重視し、将来につながる活動を目指す



アンケート結果

10月18日(土) ポスト災害メモリアルアクションワークショップに関するアンケート結果

(回答数 12 件)

1. 所属を教えてください

企画委員	3名
高校生	5名
高専生	1名
大学生	3名

2. ワークショップに参加した理由をお聞かせください (自由記載)

- ・先生に参加して欲しいと言われたから
- ・先生からお誘いを受けたから
- ・教員からのすすめ
- ・近かったから
- ・メモアクの活動紹介をする場があるから参加しました。
- ・開催されるのが嬉しかったから
- ・30年メモリアルの今後を再考するため
- ・メモアクの活動でインタビュー班として活動していて今後 SNS 以外の方法でも様々な人に見てもらうためにどんなことができるか意見をもらいたかったから
- ・防災について追求したいから
- ・委員として参加したいと思ったため
- ・31年目以降、どのようなビジョンで阪神・淡路大震災を伝えればよいか考えたいので。
- ・学生の他校との交流機会創出

3. ワークショップで良かった点をお聞かせください (自由記述)

- ・今後を考えられた。気づけなかった意見を聞いた
- ・各団体の取り組みを聞いたこと
- ・学生から大人まで幅広い年代の方と意見交換ができたから
- ・若い人の意見を積極的に取り入れようとしていたところ
- ・いろんな人の意見を聞くことができ、自分の知識にプラスになるようなことを学べた
- ・同年代が固まることがなかったから考え方の違いが見えた
- ・年齢、職業、様々な立場の人の意見を交換し、それぞれの考えが深まったこと
- ・様々な年代や職業の方が意見を出し合える場があり、いろんな角度からの視点を知ることができたのがよかったと思う
- ・いろんな意見が出てとても興味深かった
- ・これまで以上に大人(委員)の声も聞いたところ
- ・企画委員と若者、過去を振り返るのではなく、前向きに考えるという点で共通していることがわかったことが収穫
- ・自校以外の方との交流

アンケート結果

4. ワークショップへのご意見や感想、今後期待することをお聞かせください (自由記述)

- ・もっと大規模になって欲しいと思いました
- ・今日の本題は、おそらくテーマ決めだったのでもう少し時間が欲しかった
- ・もっとたくさんの人とお話してみたいです
- ・グループだけでなく、全体での交流
- ・班の人と喋って、コミュニケーションをとれて良かった
- ・またしてほしいです
- ・キャッチコピーの名前は他の人に話したときに「なにそれおもしろ！」ってなるようなフレーズにしたいです！
- ・自分では出ないような意見や言葉があり視野が広がり、良い経験になった
- ・グループにいる人が高校生ばかりだったので知り合い同士がいらないよう全員が初めましての状態で行きたい
- ・ワーク内容に依るところかと思いますが、ワークショップ時間をもう少し長く設定してしまってもいいかもと感じました
- ・学生らが発表する、企画委員はそれを眺めているスタイルではなく、今回のように、企画委員からもどんどん発表、発信できるスタイルがよいですね
- ・テーブル側の学生も他テーブルに行けるようにできればよかった

5. ワークショップで印象に残った言葉やフレーズを書いてください (自由記述)

- ・学んで終わりじゃなく、次に繋げる。神戸が1番じゃなく、出発点に
- ・メモリアルに焦点を置かないこと
- ・ハイタッチ (3件回答あり)
- ・自分勝手
- ・「人のためだけじゃない、自分のためにも」
- ・30年前の言い伝えが現代にも使えるのか？という言葉。今と昔のギャップを考えながら、良いところだけをピックアップしていけばいいと分かった
- ・自分のためにする
- ・#〇〇
- ・(フェーズフリーのような意味での)呼吸をするような防災
- ・「Action は残したい」という大学生の言葉

6. ワークショップの満足度 (5段階評価)

満足度 5	6人
満足度 4	5人
満足度 3	1人

7. 次回も参加したいと感じましたか？

はい	12人
いいえ	0人

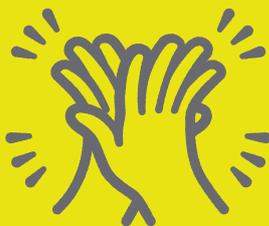
BEYOND 30+ 大交流会

日 時 2026年1月10日(土) 13:00 ~ 16:00

内 容

- ・開会のあいさつ
- ・企画趣旨説明
- ・活動紹介セッション
- ・パネルディスカッション

場 所 人と防災未来センター西館 1階ガイダンスルーム



Memorial Conference in KOBE

BEYOND30+ | 2026

開会のあいさつ

BEYOND 30+ (メモリアル・コンファレンス・インKOBE)
企画実行委員会委員長
関西大学社会安全学部教授 奥村 与志弘



奥村 与志弘 委員長

皆さん、あけましておめでとうございます。実行委員長を務めさせていただきます関西大学の奥村と申します。

新年早々、島根・鳥取で大きな地震があって驚かれた方も多かったんじゃないかなと思います。南海トラフ巨大地震、いつ発生してもおかしくないということで太平洋側の警戒は強まっておりますけれども、昨今の地震の発生の方を見ていると、日本海側も油断できないというふうに感じられている方も多いかと思います。

今年 2026 年は、昨年のように災害とか防災とかって意味において大変な 1 年にならないことを願っているんですけども、2025 年は本当にいろいろなことがありました。

ご存じの方も多いと思うんですけども、3月31日に、南海トラフ巨大地震の被害想定が新たな形で発表されました。2012年に発表された被害想定は、人と防災未来センター長の河田先生が取りまとめられて、32万人の犠牲が出るということで、ここまで南海トラフに備えた取組が進んでいたわけですけども、3月31日、社会の情勢の変化も踏まえて新たな想定が発表されました。それを踏まえて、これからさらに未来に向かってどういう形で防災を進めていったらいいのかということと向き合う、そのスタートが切られたということですね。

7月31日には、覚えてらっしゃる方、今日来られてる方は、結構、防災に関心のある方が多いと思うのでご存じだと思いますけど、カムチャッカで大きな地震があったことを覚えてますか？

高校生の皆さん、カムチャッカの地震って覚えてますか？

ちょっと遠いところで、太平洋の北の方でマグニチュード9クラスの大きな地震が発生して、それが、日本にも津波という形で伝わってきたんですね。津波の情報が出ました。警報が出ましたけれども。

これも、よくよく情報を集めていただくと、大変なことなんです。何が大変かって言うと、実はカムチャッカというのは、1952年にマグニチュード9.0の地震が起こってるんです。私たちって、災害プレートの境界って一定の周期で繰り返すって信じてるんです。ちょっとずつエネルギーがたまったら解放されるっていうのを、ずーっと繰り返されている。

南海トラフだってそうだ。前回、1952年にマグニチュード9.0の地震が起こったから、まあ、しばらくはないでしょう、あんなところで。思ったところで、またM9クラスですからね。地震学者も驚いて、一体何が起こってるのか。結局のところ、地球上で発生している地震、きつこうなるんじゃないかと私たちが信じていることなんて、本当に怪しいことばかりだということです。

だから、2030年代に起こるんじゃないか南海トラフって言ってますよね。起こらないかもしれないですよ、逆に。でも、もしかしたら明日起こるかもしれないですよ。最大クラスのマグニチュード9クラス想定してますけど、9どころか、もっと大きくなる可能性だってあるかもしれないし、逆に、物すごく小さいかもしれないですよ。私、死んだ後に起こってくれたらいいなと思ってるけれど、どうなるか分からない。何にも分かってないということを、改めて去年夏、知らしめられたという、そういうふうにあります。

開会のあいさつ

もう一つ。12月8日に青森県で地震が発生したのを覚えてますか？あのときのマグニチュード7クラスの地震、プレートの境界で起こったんですよ。そうすると、もっと大きな地震があつ境界で起こるんじゃないかって、警戒しないとイケない。

北海道三陸沖の「後発地震注意情報」っていうね、もう名前が長くて私もメモを見ないと覚えられないぐらいの名前なんですけど、出たんですよ。これ、どういうふうに受けとめたらいいのかって、本当に分かりづらい情報で。これ、南海トラフの「臨時情報」ってありましたよね。あれとすごく似たようなタイプの情報なんですけど、私、実は、臨時情報とかこの後発情報、注意情報をどういうふうに運用していったらいいのかということを考える政府の委員を務めてるんです。作ったのは私じゃないです。作ったのは、もっと立派な偉い先生が作ってらっしゃるんですけど。

これ、どうやってやっていくのかということを考えるための委員をやって、7月にも会合があつて、ガイドラインを見直して発表してるんですけども。これね、地震予知みたいにとられてしまうのは本当に良くない。これ、臨時情報とか南海トラフの注意情報って、1週間以内に起こる確率が統計的に高くなってから、まあ事前対策で、これやっというたらいいかなと思うことをやっというかねって言うだけなんです。なので、改めて、この去年のいろんな災害を振り返ると、事前対策をしっかりやっておかないとイケない。こうなるかどうなるかっていう将来の災害がどうなるのかっていうのは、もう地震学者の皆さんに任せておいて、どういう形で起こってもいいようにしっかり備えておくということが大事だということ、去年2025年、何回もそういうふうな思いにさせられたということですね。

ちょっとスライドを見ていただけたらと思うんですけど、「BEYOND30+」という行事を、ここ、このH A T神戸でスタートさせようというふうにしています。

開会の挨拶なんですけどね。趣旨説明はこの後にするんですけど、開会の挨拶に先立って、昨年のいろんな出来事を少し振り返らせていただいたんですけども。今年31年、阪神・淡路大震災から31年です。31年前、私、まだ中学校2年生の冬でした。今日から3連休ありますけれども、この神戸の震災も3連休明けの朝方に起こります。今回の3連休明けは穏やかに何事もないことを願ってますけれども、31年前の出来事です。

震災から31年も経ってる。中学校2年生の生徒だった人間が、もうこんなおじさんになってしまいました。45歳です。「メモリアルやります」と、まさに私、開会の挨拶してるわけですよ。まだやるの？っていう声が聞こえてきそうですね。実際、私にも、「まだやるの？」と直接言われたこともあります。まだ、まだやるんです。まだやるんです。31年が経過した、まだやるの？っていう声が出てくるからこそやるんです。今だからやるんです。やらないとイケない。やらないとイケないだけけれども、31年前のその大変な被害を忘れないためにやるというよりは、それを語り継ぐためにやるというよりは、今日、若い学生さん、大学生、それから社会人として第一線でご活躍の方から、リタイアされても第一線でご活躍の方から、いろんな方、今日お越しいただいてるんですけど、今を生きる人々にとって必要なメモリアルの行事、それから、これから生きていく、そういう人々にとって必要な未来に向けたメモリアルっていうものを考えていきたいと思っています。

昨年2025年のいろんな出来事を振り返って、このメモリアルの事業が失敗したら、きっと将来の大きな災害でまた大きな被害を出してしまう。まだやるの？とメモリアルの行事が言われているような社会をどうにか変えて、ここで、こういうメモリアル行事が必要なんだ。神戸からこういうことをやったことがきっかけになって、東日本大震災の被災地でも、熊本でも、能登でも、このようなメモリアルの取組が、これから震災後30年、40年、50年、スタートが切られるような、まず我々この神戸のこの地からスタートを切りたいと思っておりますので、皆さん、ぜひ話を聞きに来たというのではなくて、一緒にこのメモリアルをつくりに来たという、そういう思いで今日ご参加いただいて、来年以降も。まあ、開会の挨拶になりますね。来年以降もご関心を持っていただくと嬉しいかなというふうに思っ、今日、開会の挨拶とさせていただきます。

すみません。実行委員長とかするの初めてで、慣れてない。許してください。(笑)

では、よろしくお願ひします。

企画趣旨説明

BEYOND 30+ (メモリアル・コンファレンス・インKOBЕ)
 企画実行委員会委員長
 関西大学社会安全学部教授 奥村 与志弘



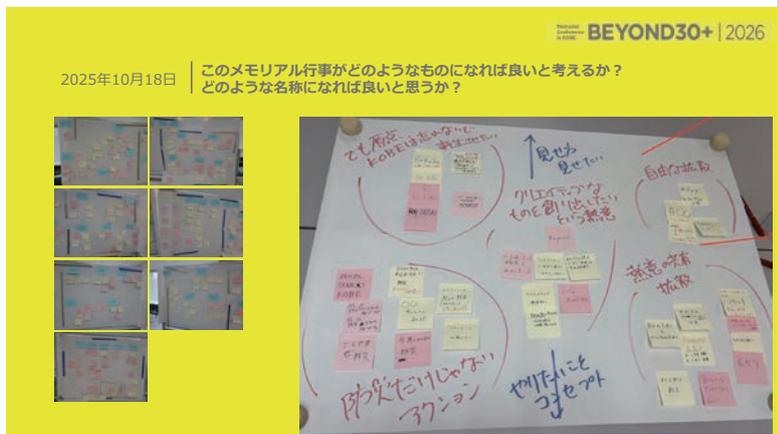
Memorial Conference in KOBE
BEYOND30+ | 2026

趣旨説明に移らせていただきます。

この「Memorial Conference in KOBE」、「BEYOND30+」と小さく前のところにこの「Memorial Conference in KOBE」という言葉を書いているのにお気づきの方もいらっしゃるかと思いますけれども、これ、実は、このメモリアル行事の最初の名称が「Memorial Conference in KOBE」という名前ですとずっと開催されてまして。そのときの想い、まず31年前の大変な災害のその被害を、その教訓を、他の地域の人たちに、そして、21世紀のためにそれをしっかり語り継ぐんだという

ことを念頭に取組が行われていた。「そうです」と言います、私、だってこちらにいた高校生とか大学生ぐらいだったので、リアルタイムでは知らない。だから、そうだそうです。実行委員長ということでいろいろ調べたら、いろんな方が文集の中で自分はこんな経験したみたいなのを溜めて、ホームページとかで公開されてたのを見つけました。ああ、いろんな大変なことがあったんだっていうことをいろんな人に知ってほしいということがあったんだというのが、よく分かりました。

今、その未来のために、他の地域のためにメモリアルをするという趣旨自体は、何も変わらないと思っています。なので、そういうところはブレずにこれから30年、40年もやっていけたら良いかなと思っています。他方で、震災後の大変さを知ることであれば、何も神戸のその現場から学ぶだけでなく、東日本や能登半島や熊本地震や、災害後のしんどさだけでなく、他の被災地からも学べるわけですよね。それに、生まれる前のことを言われてもねっていう顔があるじゃないですか、高校生とかね。まあ、大学生もそうですよね。もはや生まれる前の出来事です。30年前を忘れるなって言われても、第二次大戦を忘れるなって言われるのと同じような感覚で多分聞こえてくると思うんですけど、少しやっぱり、皆さんのためのメモリアルというふうにするために、どうなったらいいかということをやったりこの中に新たに付与していかないと、どんどんどんどんこれが大事だと思ってる人たちの高齢の世代だけでやっていくようなものになってしまう。なので、今年は、そのメモリアルをより一層加速させていくために、若い皆さんの知恵が欲しい。感覚を大事にしたいと思って、この会を今年からどんなふうにしていったらいいかを考えてきました。今日、1回目のこの第1回の行事なんですけど、実は、今日行事をするにあたって、既に10月にワークショップをしています。



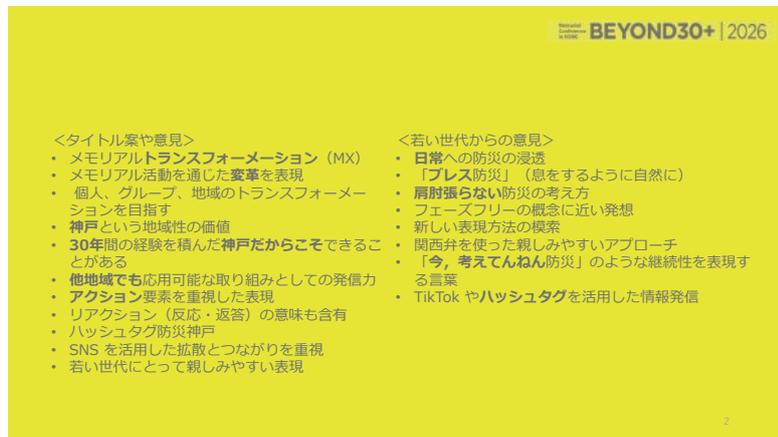
どういうワークショップをしたのかと言いますと、このメモリアル行事がどんなものになれば良いというふうを考えますか。さらに言うと、今日、「BEYOND30+」というところに落ちつきましたが、どんな名称、どんなメモリアル行事になったら良いと思いますか？もしかしら名付けの親になれるかもしれないみんな一緒に考えようやというので、ワークショップしたんですよ。ごめんね。学生の皆さん、ごめん

なさいね。一生懸命これ、書いてくれたんですよ。ね、めっちゃくちゃいろいろ書いてくれた。全部採用しました。(笑) すみません。

だけど、言葉として全く同じ「BEYOND30+」というのがこの中になかったというだけで、既に、あ、私の考え

企画趣旨説明

がチラシの中に込められてるって気づいてる人、いっぱいいるんじゃない？私、皆さんの意見・考えを無視したわけじゃないんです。どうすれば全体を表現できるかを10月18日、大きな宿題をいただきました。それから、これ、実行委員もたくさん入っていたので、若い人だけじゃない。これまでのメモリアルに想いを持っていっていらっしゃる方々の気持ちも大事にしながらかの31年目から40年目に向かわないといけないので、これ困ったなーと思って悩んでたんですけども、副実行委員長の中野先生、それから、人と防災未来センターの研究员はじめ、このワークショップの後、コアなメンバーでいろいろ集まって議論を重ねて、そして、この左上にあるタイトルに落ちついたんです。全く無視してないんですよ。ここに「BEYOND」ってあるでしょ。それから、ここにハイタッチってあるでしょ。ハイタッチのイラスト使ってますよね。それから、「メモリアル」っていう言葉。でも、「原点」を忘れないっていう、こういう言葉もいっぱいあったんですよ。「UP DATE」とか「RE BOSAI」とか。こういう「BOSAI 原点を考える」、だから「Memorial Conference in KOBE」を残したんですよ。逆に掘り起こしたんですよ。最近それ使ってなかったから。



それから、だけどそれだけじゃ嫌だっていう、この防災だけじゃないいろんなアクションしてるから、そういうところにもプラスになってほしいという、「今考えとうねん」とか「チャレンジ」とか「コネクト」とか、「メモリアル」「Transformation」とか「防災トランスフォーメーション」、いろいろこういう。「Not 防災」ってね、防災したくないみたいな何か表現もある。(笑)

何かこういうのも何かうまいこと引き出したかったし。それから、クリエイティブなものをもっと生み出したいというような「クリエイティブ」。「ふり返っている時点で止まっている」という言葉とかね。いろいろいい言葉いただいています。もっと拡散せないかん。ハッシュタグとかね。この辺りとかだったら、熱量・熱意をもっと拡散させられたら良いな。「High Touch」、あります。「たすき」とか「バトン」は嫌だという声があったんですね。こんなね。私のバトンを受け取ってくれる人いますか。高校生。嫌でしょ。(笑)

タッチぐらいが良いよねっていう世代なんだっていうことが、よく分かりました。

なので、このメモリアルはバトンのリレーではなく、たすきのリレーではなく。ね、お正月大変そうでしたよね。あんな重責背負って。たすき背負って走るの大変よね。ああいうのが得意な人は、そういう世界で活躍してもらったら良い。メモリアルのこの防災の世界というのは、とにかく仲間を増やすことが大事。たすきとかバトンとかっていうそういうふうなものを背負って頑張る人だけでやってたら、なかなか広がらない。

昨日、私は、鍵の業者さん、鍵をつくってる会社、これ寡占状態です。鍵の会社の方とお会いしてます。それから、防犯の会社の方ともお会いしてます。自分たちはこれからどんなことをやっていったらこの競争の中で生き残れるかっていうことで悩んでらっしゃいます。

災害のときに、鍵で何が問題になってるかご存じですか。

一緒に、阪神・淡路のときから30年間、鍵で一体何が問題になってきたか、どんな問いが突きつけられて解決に向けて努力が行われてきたか掘り起こしませんか。セキュリティの会社、いろんなお得意さんがいます。災害が起こったときのセキュリティの問題というのは、セキュリティ会社のお客さんが能登半島地震のときにはどんなことに、どんな問題に直面されてたかって、調査されてますか？阪神のときは、東日本のときは。

そうですね。もし、その問いがどういうものか分かってたならば、契約者の方々に、もっとこういうふうなサービスうちやりますよ。もっと大手の警備会社と勝負できるようになるかもしれない、こういうことですよ。

防災を考えるということが、企業を成長させる。そのきっかけになることは間違いない。だけど、場がない、そ



企画趣旨説明

の仕組みがない。それは、ここに今、誕生させようとしています。協力していただきたいし、皆さんにもアイデアを出していただきたい。そういうふうな形でこの行事であるということを、まずは皆さんに知っていただきたい、こういう趣旨だということですね。

タイトル、もう一回、ちょっと話戻りますけど。タイトル案とかっていうのも、いろいろ挙げていただいています。「Transformation」。私、「防災トランスフォーメーション」って最近呼んでるので。企業とか地域とか個人だとか、いろんな方が防災と向き合うことによって大きく変革していくという、そういう可能性を学術的にきちんと体系化していきたいというふうに思っています。

「Transformation」。これ、今日、旅行会社の方も来られてますけれども、いろんな業界が、この日本の中でオンリーワンの会社、防災・災害のことをしっかりと配慮した、そういうふうな会社としてのサービスやプロダクトを生み出せるとなると、世界で勝負できる。

去年、ベトナムで大きな水害があったのを覚えてますか？本当に去年、いろいろありましたよね。ポカンとイオンのイオンモールが水没せずに残ってたの、覚えてますか？私、一昨日、そのイオンモールの部長さんと、いろいろこれからどういうふうにイオンのグループをより発展させるかの議論をしてました。間違いありません。日本は、災害のことをちゃんと分かって仕事をしてる。だから何かあったときに、日本という社会が生み出した価値のその重要さに、絶対気づいてくれる。そういうことで「Transformation」していけるはずだと思ってるんですね。

神戸という地域の価値。やっぱりね、東北も大変な災害だったから東北から学ぶことも大事だけれども、31年間、こんな世の中にしていけないといけないという、そういう歳月がここには流れてて。10年かけてうまくいったとか、20年かけてうまくいったとか、31年かけてもまだうまくいってない問いがいっぱいあるんですよ。その31年間に目を向けるということ、うまくタイトルの中に落とし込んでほしい。だから「30+」は書いたんですよ。「30+」書いた。「他の地域にも」とか「アダプション」というのも大事にしてほしいとか、こういうふうな意見がありました。

若い世代に特化すると、日常とか、息をするように自然に防災できへんのかとか、肩肘張らないように。

もう私、めっちゃ肩肘張ってますよね。引かないでくださいね。(笑)

すごい。そう。世代的なものかもしれません。もうちょっと気楽にやりたいんだと思うんですけど、若い人はね。今考えてんねん防災。今日も何かいろいろ書いてとか言われると思うんですけど、何も出てこうへんかったら、何もありませんって回答してください。分かりません。そのまま背伸びしないでいいかなと思っています。

こういうふうに、若い世代の想いもうまく表現しながら。私ね、ついつい私の悪いところなんですけれども、ワーツてなっちゃうと周りがついてきてないことに気づかないまましゃべり続けてしまうんですよ。

このメモリアル行事が成功するかどうかは、若い人に、先生ちょっと待ってって止めてもらえるかどうかも鍵ですよ。(笑)

先生、もう、ちょっと突っ走り過ぎですよと言ってください。肩肘張らずに実行委員長やりますし、皆さんにとって、ここにいて心地よい行事にしたいと思ってますから、よろしくお願いします。皆さんをゲートにしてもっともっと防災と全然関係のないようなことで、一生懸命やってる人があそこにポスターを掲示して、うち作ってるこのゲームのこれ、何か防災、阪神からもう「BEYOND30+」で何か情報収集できへんかなとかね。何かこう、小物を一生懸命作ってる、自分で個人で作ってる人とかね、どんな人でも良いんですよ。ここに来たら、今、神戸が30年間向き合ってた問いで解決できてないものを自分が解決できるかもしれないという想いで、肩肘張らずに、防災のこと全然分からなくてもいいや、参加してみよう。こういうふうになることをこの趣旨としています。このイベントの趣旨というふうにしていきます。

だから「30年を超え紡いできた問いを、未来へ向かうチカラに」していこうと。もっともっとこれまで以上にこのメモリアルの行事を未来志向に、皆さんのためのものにしていこうということです。よろしいでしょうか。

で、こういう名称になったということですね。

最後、これだけ見て終わりたいんですけども。96年にメモリアル行事が始まっています。「Memorial Conference in KOBE」は、被災者自身が経験から教訓をくみ取り、世界へ、そして未来へ届ける場ということです。

企画趣旨説明

2006年には世代間の語り合い、2016年からは未災者による自由なアクションへと広がって、神戸のこのメモリアル取組というのは時代とともに進化してきた。今、震災から三十余年を迎え、私たちが向き合うべきは震災当時の記憶ではなく、現在に至る歩みや変化、そしてその過程で紡がれてきた問いの数々だと思っています。

「BEYOND30+」は、「世界へ、未来へ」の想いや「未来を担う人びとによるアクション」など、これまでのメモリアルの精神を継承しながら、未来への問いや挑戦を創り出すことに力点を置く、これまでにない新しいメモリアル行事です。この行事は、三十余年を超えて紡がれてきた問いを見つめ直し、語り継ぎを超え、私たち自身をも、今の自分のこの状況をもっと超えていく、「BEYOND」していく、そういう未来へ向かうチカラを生み出す場として発展していくことを祈念しています。

皆さん、未来へ向かうチカラを、ここから生み出していきましょう。ということで、趣旨説明とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

活動紹介セッション

出展団体①

兵庫県立尼崎小田高等学校
看護医療・健康類型



尼崎小田高校からまいりました楠本と朝山と山中です。

私たちは、東北被災地訪問や「ゆめ風基金」との交流など、さまざまな活動をしました。ペット防災や段ボールトイレでの紙芝居の制作は、子供たちにわかりやすく防災について考えてもらうような工夫もしました。

私たちの活動には、「人とのつながりがある」という共通点があります。これから私たちは、「若者から始まる防災」を広げていきます。

今回の交流会では、私たちの探究を発表するとともに、他校の発表を聞いて、これまでしてきた探究との共通点や違いからたくさんのことを学べる機会にしたいと思います。



活動紹介セッション

出展団体②

TEAM-3A



こんにちは。TEAM-3Aの顧問をしております高橋と申します。

チーム紹介からさせていただきますが、4年前に私が教師を辞めたときに、一緒にやっていきたいという高校生と卒業生で作ったチームです。現在は、最年少がまだ中学生、今日はパネリストとして登場する子から26歳の社会人までいます。中には、小学校の先生になってから実際に防災に取り組んでいるような子もいます。

今日のメインは、これからこのチームがどのようにしていくかということで、一つは、今日ここで紹介させていただく新しい活動のアイテムの紹介と、それから、中学校の部活動の地域移行に向けて、そこで出てくる中学生による地域活動クラブとして、明石市では、この「TEAM-3A」を参集します。

同時に、加古川の方でも、高校生と大学生でそういうことに興味がある子がいますので、これからそういう地域防災についての「中学生のクラブ活動」というものを展開していきたいというふうに思っています。

中心は、やはり今までやってきたとおり、「若い力を地域に」ということを一つの合言葉でやっていきたいと思います。



活動紹介セッション

出展団体③

関西大学社会安全学部奥村研究室

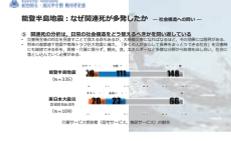
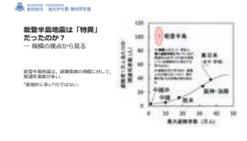


関西大学社会安全学部の奥村と申します。簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は、災害関連死の問題に注目して研究を続けています。阪神・淡路大震災で、初めて世の中が知った、認識した犠牲なんですけれども、921人の方が亡くなられています。この災害関連死に関して、私、いろいろな問いと向き合ってきています。

簡単にご紹介しますと、まず、なぜこれまで災害関連死は被害想定に含まれてこなかったのか。阪神でたくさん亡くなったのに、将来の災害においてどれぐらいの犠牲が関連死で出るのか、これ、わからないままでした。これは解決しました。

他にも問いとしては、災害関連死の規模。これ、どうやったら試算できるのかとか、災害関連死に関して能登半島地震ってどれぐらいの問題になっているのかということがあるわけなんですけれども、なぜ災害関連死が多発したのかというのも重要な問いでしたし、それから、この問題、災害関連死対策を通じて「住みたくなるような社会」って何とかまいこと作れないかというようなことも、今、私は向き合っている問いの一つです。



活動紹介セッション

出展団体④

防災世界子ども会議実行委員会/
NPO法人JEARN



1 minute
speech



JEARN 防災世界子ども会議実行委員会が主催する「防災世界子ども会議 (NDYS)」について。防災世界子ども会議は、阪神・淡路大震災 10 周年記念事業として、兵庫県を中心として世界の皆様にいろいろお世話になったので、その感謝の気持ちを世界に伝えようと、子供たちが始めたプロジェクトです。

阪神・淡路大震災から去年で 30 年。私たちは 10 年を記念して始めましたので、記念すべき 20 年を、昨年の 3 月に行いました。そして、内容としては、テディベアを留学生として交流したり、いろんな形で楽しく学んでいます。デジタルを使っていますので、インターネットのことも勉強できますし、国際協働学習ができると思っています。

どうぞグローバルな展開をする防災教育を、一緒にやりませんか。よろしくお願いいたします。



活動紹介セッション

出展団体⑤

KiDS

(Kyoto & Kansai University Disaster prevention School)

1 minute
speech

こんにちは、KIDSです。

私たちは、インドネシアの小学校で防災教育をしています。小学生とともにアクティブに活動をしています。私たちの活動はこのQRコードから読み取ることができるので、ぜひQRコードを読み取って活動を拝見してみてください。

そして、今日は「防災」という硬い言葉を柔軟に考えることができるように、私たちの知見を皆さんに伝えていきたいと思えます。

私も同じように、皆さんの経験とか知識とかいろいろを、コミュニケーションして新しい発見を見つけていきたいと思えます。今日は一日、よろしくお願いします。



活動紹介セッション

出展団体⑥

株式会社防災アプローチ



株式会社防災アプローチの山部 剣太です。

株式会社防災アプローチでは、「みんなで創る防災・減災」としてYouTube や LINE、 X で防災情報を発信しています。今回の展示は、そのご紹介になります。

「みんなで創る防災・減災」では、このようにさまざまな動画や画像を用いて情報発信をしています。LINE オープンチャットやX では、リアルタイムな情報、最新の防災情報や気象情報を入手できます。登録者 10 万人を超える YouTube チャンネルでは、防災啓発動画や縦型の 1 分程度の短い啓発動画を発信しています。

阪神・淡路大震災から 30 年、災害への継承が課題となる中、私たちは、若い世代を含め幅広い世代に情報を届けています。

みんなで創る

防災・減災

YouTube

登録者数 **10万人**
総再生数 **7000万回**

災害が実際に起きたらどう報道されるのかが分かる「ニュース形式の啓発動画」や、災害や防災行動などを解説する「縦型のショート動画」を投稿。

LINEオープンチャット

国内最大級 1.6 万人が参加する OC など 計 4 万人のコミュニティ。国内最速レベルで防災情報を入手できるほか、地域の情報を共有し合うことができます。

X (旧Twitter)

災害時の呼びかけやインバウンドのある防災知識など、拡散されやすい SNS の特性を活かした分かりやすい情報を発信。

防災啓発動画・画像、地震・気象の自動作画、災害時の CG、自動生成テキストなど、あらゆるデジタルコンテンツを用いて情報発信!

みんなで創る防災・減災

YouTube LINE@ X (旧Twitter) LINEオープンチャット



活動紹介セッション

出展団体⑦

NPO法人松山さかのうえ日本語学校・京都大学防災研究所



Hello, I represent the Matsuyama Sakanoue Japanese Language School in Matsuyama and collaborating with Disaster prevention Research Institute (Kyoto University). We have been conducting disaster education program for both Japanese and foreign residents in Matsuyama since 2021. Because foreigners particularly are facing some barriers, language or cultural barriers. And they also facing difficulties in understanding disaster information in Japan, for example. And there are many other challenges that they face. So that's why we conduct this (program) every four months. But recently we try to empower more foreign students and foreign workers in Matsuyama. So that they can be leaders in disaster education for whole society both Japanese and foreigners in Matsuyama and beyond. Thank you.

【1 分間スピーチ和訳】

こんにちは。私は松山にある松山さかのうえ日本語学校を代表しており、京都大学防災研究所と協力しています。

私たちは2021年から、松山に住む日本人および外国人住民の双方を対象にした防災教育プログラムを実施してきました。特に外国人は、言語や文化の違いといったいくつかの障壁に直面しています。また、日本における災害情報を理解することが難しいという問題もあり、他にも多くの課題を抱えています。

そのため、私たちはこのプログラムを4か月ごとに実施しています。最近では、松山で学ぶ外国人留学生や外国人労働者をより力づけることを目指しています。彼らが、松山、そしてそれを越えた地域において、日本人と外国人の双方を含む社会全体の防災教育を担うリーダーになれるようにするためです。ありがとうございました。

外国人防災教育コーディネーター養成事業

多様な背景を持つ人たちが、地域防災の担い手になるために
災害時、言葉や文化の違いが命に関わる場合があります。本事業は、在留外国人と日本人が共に学び、「多文化共生の視点を持った防災の担い手」を育てる取組です。



これまでの歩み

スタート 2021年- 609名 14か国
（2025年12月末時点）



なぜこの事業が必要なのか

日本には、さまざまな国や地域から来た人たちが暮らしています。災害は、国籍や言語、文化の違いに関係なく、誰にも起こります。しかし、
●災害時の情報が分かりにくい ●避難所での生活に不安がある ●文化や宗教の違いから困ることが生じる

事業全体の流れ

本事業では在留外国人が「防災教育コーディネーター」として活躍できる人材になることを目指します。日本人と外国人が共に学びながら、全4回のワークショップ・勉強会を実施予定。現在、4回を終了し、学びは「実践」に向けて進んでいます。

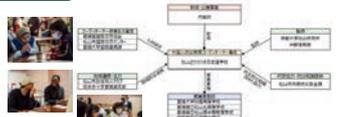


実施済プログラム

●世界の遊びと防災 (2025.10.12) ●明日へのタイムライン (2025.12.13-14)

連携体制

本事業は、行政・大学・地域団体・NPOが連携して実施しています。また、日頃から地域防災に関わる団体や学校との関係をつくることで、実際の災害時にも、自然に助け合える関係づくりを目指しています。



これまで、そしてこれから

私たちが目指すもの
これまで私たちは、多文化共生型防災教育を通じて、在留外国人と日本人が共に学び、実践する機会をつくってきました。この取り組みを継続し、地域に根づかせることで、災害に強く、誰一人取り残さない地域を目指します。活動の様子や、随時公式サイトやSNSで発信しています！



活動紹介セッション

出展団体⑧

国立明石工業高等専門学校
D-PRO135° (明石高専防災団)



皆さん、こんにちは。私たちはD-PRO135°明石高専防災団です。私たちは、防災士を活用して地域の皆さんに楽しい防災を届ける活動をしています。

昨年度までの「災害メモリアルアクションKOBE」にも参加させていただいて、その際には、こちらに書いている「TRY！」であったり「災害疑雨（だうでい）」であったりといったゲームの紹介をして、皆さんからたくさんの意見をもらってゲームの進化を進めてきました。

今年度特に力を入れて進めていたゲームが、こちらの「つめつめ」というゲームになっています。小さい子どもから高齢者まで、皆さんが自分の防災バッグをつくるならどういったアイテムが必要かというのを考えながら、身の回りの防災、災害の備えについて考えるきっかけとなっています。これからも私たちは、地域に根ざした防災の教育活動を進めていきます。

よろしくお祈りします。

D-PRO135°

明石高専防災団

ゲーム開発班

つめつめの活用と発展

昨年度のに開発され、今年度いろいろな場所で実装してきた「つめつめ」。実際に活用していく中でいろいろなルールが発展してきました。

つめつめのルール

テーマ：自分の防災バッグを作る

- ・アイテムを3つ釣る
(もしくは、たくさん釣って最後に持って帰る3つを後から選ぶ)
- ・リュックに名前と釣ったアイテムを記入する。
- ・釣ったアイテム以外に必要なものを考えて
(もしくは実際に防災バックを見て) 記入する。
- ・バックに色塗り、お絵かきをする。
- ・釣ったアイテムをバックに包んで完成。作ったバックは持ち帰りできます。

つめつめは釣りゲームや塗り絵という楽しい入口から、防災バッグの備えへとつながる体験型のゲームです。子供が体験するだけではなく、周りの大人もこのゲームを通して、家庭の備えについて考えたり、子供と防災を話し合うきっかけができます。これからも、つめつめがより多くの場面で使えるように、ルール整備と開発を続けます。

RESQ

町のいろいろなところ起きる災害のミッションを解決！
サイコロを振って町中を移動し誰が一番最初に解決できるかを競います。

TRY!

手元にあるのは5つのアイテムカード。与えられたお題を手元のカードを指定された枚数で解決しなければなりません。果たして防災士達は災害を予想してナゾに勝利することができるのか？

だうでい

防災版大狼ゲーム。災害を起すナゾス。災害に備える防災士と強い会いの戦いが勃発します。果たして防災士達は災害を予想してナゾに勝利することができるのか？

ホームページ

D-PRO135

<https://sites.google.com/view/d-pro135>

X(旧Twitter)

@135_d_pro

Instagram

135_d_pro

D-PRO135°

明石高専防災団

地域交流班

2025年度の取り組み

今年度も多くのイベントに参加させていただきました。これまで行ってきたゲームに加え、「つめつめ」を活用した小学生以下の子供たちと触れ合う機会が増えたと感じています。また、今年度初めて行った試みも多く、活動の視野を広げるきっかけとなりました。

平岡東地区ふれあいまつり R7/10/12

加古川の平岡東中学校で行われた祭りにブースを出展しました。防災ゲームTRY!、RESQの体験と共に、自治体からいただいた期限の近い備蓄のアルファ化米を試食として提供しました。いろいろな味があることに驚く人もいながら、大人から子供まで楽しんでいただけました。

明石ビブレ R7/8/27

大久保の明石ビブレで「つめつめ」を体験できるブースを出展しました。買い物に来ていた親子や、近くの保育園からも遊びに来ていただきました。また、展示していた防災バッグに興味を示される方もおり、子供向けに開発したつめつめが、より広い層にアプローチできるのでないかと感じたイベントでした。

手話サークルはりさんでの講義

播磨町で手話の普及のために活動されている手話サークルはりさんでクロスロードゲームとTRY!を用いた防災講義を行いました。聴覚等に障がいを持つ方がおられる中で、手話も学びながら実際に輪の中に入り、一緒に防災について考えました。また、多くの方が阪神淡路大震災の経験を話してくださいました。中には障がいがあることによる被災時の難しさなどの実体験を持つ方もおり、自分たちの想像していなかった新たな観点から防災のあり方について考えるきっかけとなりました。

←防災スカーフ
災害時に障がいがあることや、筆談、手話ができることを示すスカーフ
(兵庫県聴覚障害者協会より)

ホームページ

D-PRO135

<https://sites.google.com/view/d-pro135>

X(旧Twitter)

@135_d_pro

Instagram

135_d_pro

活動紹介セッション

出展団体⑨

神戸市立工業高等専門学校 EC3



1 minute speech



私たちは、神戸高専の環境地域貢献サークルです。

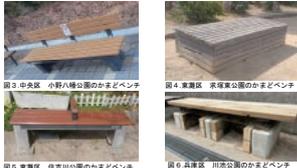
私たちは普段、環境の保全や地域社会の活性化、また防災等に貢献するために、学生が主体となって活動をしています。

今年度は、こちらに展示している「かまどベンチ」の現状や課題について調査いたしました。今、神戸市には、かまどベンチは20基ほど設置されていて、私たちの中では聞きなじみがなくて、それについて調査し、皆さんに広げることで、もっとかまどベンチを利用していきたいと思えました。そして、この調査結果を、今年度の春にあった「レジリエンスセッション震災と未来のこうべ博」で展示いたしました。

今日は、同年代の方々といっぱい意見を交流して頑張りたいと思います。

かまどベンチの現状と課題
活動報告神戸高専
EC3
(環境地域貢献サークル)

かまどベンチの種類

かまどベンチの現状③
～まとめと改善案～

- かまどベンチは利用方法を各管理者に任せられているため、利用量には差がある。
- 災害時にかまどベンチを使うのが困難な地域住民とその周りで被災した人であり、急に使えるものではない。
- かまどベンチは一度置けば災害時に必ず使えるものではなく維持管理が必要である。
- かまどベンチの認知が少ない。

- かまどベンチを災害時に使えるようにする利用(練習)方法の提案
- 維持管理に必要な経費の提案
- かまどベンチの認知向上

関連リンク



EC3公式ウェブサイト

神戸市内の
かまどベンチ設置箇所
(googlemap)

調べたきっかけ

防災公園を整備する際、設置する備品として防災備蓄倉庫やマンホールトイレ、そしてかまどベンチが名前として挙がる。実際に神戸市の公園には約20基のかまどベンチが設置されている。しかし、現状としてかまどベンチを使ったり、もし使ったとしてもかまどベンチの存在はほとんど知らない。その背景には、かまどベンチに使用しづらい、欠点があり、使われないと推測される。神戸高専の防災課ではかまどベンチの存在を調べ、使われない原因を明らかにするとともにかまどベンチの活用方法がわかりやすく提案している。

調査方法

- 神戸市と神戸市内のかまどベンチを設置している公園の各管理者にヒアリング調査を行う。
- 神戸市内のかまどベンチを設置している公園を訪れ、かまどベンチの現状を調べた。

かまどベンチの現状①
～神戸市のヒアリング～

神戸市を対象に行った結果、様々な問題点が浮かび上がってきた。

神戸市はかまどベンチの設置を行うが、利用方法は各公園管理者に使用方法を任せられている。また、利用回数かまどベンチの数は把握しておらず、利用に際する方針等もない。そして、行政として、かまどベンチの使用方法の指導も行っていない。そのため、各公園によって利用頻度の差が生まれている。

また、災害時にかまどベンチを使用すると想定されているのは災害発生から一週間程度までの期間である。しかし、平時は非常の救助優先となり、その期間にかまどベンチの利用方法の指導を行う事はできない。そのため、事前に利用方法の周知が必要であることがわかった。また、各公園の使用率から、管理側のシフトの確保ややすがつく、ベンチが崩れに小さいという問題があることがわかった。

今後の課題

かまどベンチの利用方法の提案

神戸市には約20基のかまどベンチがあるため、是非活用したいと考えている。しかし、炊き出しを目的とした訓練では、かまどベンチ自体が小さいため、扱いにくい。私達も、かまどベンチが災害発生から、炊き出しが始まるまでの遅れを取り、身を寄せ合う場となると考えている。そのため、焚き火台として地域で食料を持ち寄って災害時に使えようとする地域実践し、防災について考えるきっかけとなるような活用方法を提案したい。

かまどベンチの認知向上

かまどベンチという名前を知っている人はいても、ベンチを見てかまどベンチだと気づく人は少ない。そのため、かまどベンチがあることを知らせるようなシールを作成し、公園に貼ったり、かまどベンチのある公園がわかるようなマップを作りたい。

かまどベンチとは

かまどベンチとは災害時に炊き出しができるようにベンチがかまどになるものである。燃える部分を取り外しかまどに換装し、空の炊き出しの薪を投入して使用する。神戸市内では各地の公園に約20基設置されている。

かまどベンチは焼物メーカーが設置している。そのため、神戸市にも複数の種類が設置されている。

全国各地で高校生がかまどベンチを自作し、設置するという事例もある。

図1 東灘区 森田公園のかまどベンチ
図2 須磨区 須磨浜公園のかまどベンチかまどベンチの現状②
～兵庫区 川池公園のヒアリング～

神戸市のヒアリングの後、兵庫区にある川池公園の高尾緑地を訪ねた。

川池公園では、数年に一度かまどベンチを使用している。その時は炊き出し用に調理した薪をかまどベンチで使用するようである。

この公園でも、管理者には様々な問題点がある。まずは、かまどにする際のナットの取り外しに問題がある。特に公園は野ざらしのため、**ナットが錆びやすい**。そのため、ナットのサビや劣化によってナットが留まらなくなっている。

さらに、かまど部分の**耐火力が大きく落ちてしまう**という問題や、産廃の木の劣化したり、使われないままに放置されている問題もある。

また、公園を利用する方にかまどベンチがあることを知っているかと尋ねた。すると、「薪しいベンチがあるとは思っていましたがかまどベンチだとは思わなかった」という回答であった。かまどベンチの認知も課題がある。

今後の課題

かまどベンチの維持管理方法の確保

かまどベンチが修理を行わないと災害時に使えない代物であるということを知らない人も多い。まずはその認識を持ってもらうこと、そして修理を依頼する仕組みづくりを考えていきたい。

また、かまどベンチを使ってもいいか確認しづらい点も課題がある。そのため、まずはかまどベンチを使ってもいいか確認しづらい点も課題がある。そのため、まずはかまどベンチを使ってもいいか確認しづらい点も課題がある。そのため、まずはかまどベンチを使ってもいいか確認しづらい点も課題がある。

かまどベンチの利用のマニュアル

現状、かまどベンチ付属のQRコードを最初の取扱説明書で使用方法を説明している。しかし、災害時に必ず確認が必要で無難な点や高齢者にはわかりにくい。取扱説明書があると読めないという点も課題である。そこで、ベンチ近くへの使い方の説明パネル設置や取扱説明書の保管場所の確認などを行うことで迅速に使えるようにしたい。

活動紹介セッション

出展団体⑩

兵庫県立大学
学生災害復興支援団体LAN



兵庫県立大学学生災害復興支援団体 LAN です。

私たちの団体は、兵庫県立大学の中の団体として、学生主体のボランティアとして災害時に先頭に立って動ける人材の育成や、つながりを大切にした継続的な支援を目指している団体となっております。

メインの活動といたしましては、平時では地域活動に参加させてもらったり、災害が起こった際には災害のボランティアとして最前線で動くようにしています。団体の発足の経緯が東日本大震災にありまして、東北地方を中心に活動しております。能登半島地震が起きた後は、能登半島の方にも何度か行かせてもらっております。

兵庫県立大学は学部が複数ありまして、結構いろいろな学部の、文系・理系とあって、さまざまな学問を学んでいる学生が神戸を拠点に、過去に災害があった神戸から防災の知識というもの発信していきたいと思っております。

よろしくお祈りします。

LANって知らん？

学生主体のボランティアとして災害時に先頭に立って動ける人材の育成や、つながりを大切にした継続的な支援を目指している団体です。

おさんぽガーデン
兵庫県西宮市にて開催されている「防災」をテーマに楽しく学べるイベント。年齢問わず防災について学ぶことができる「防災陣営物競争」を実施。

地域での防災学習
神戸市立灘小学校にて開催されている防災学習に参加。消火活動や避難訓練、地域の方々と共に、「水消火器」の扱い、「対決パケツリレー」など様々な種目を通じて楽しみながら防災の知識を身に付けてもらった。

学祭への出店
兵庫県立大学の総理工学キャンパスで行われる工大祭と、姫路環境人間キャンパスで行われるエコフェスティバルにて、福島県産の製品を使用した模擬店を出店している。

琵琶町秋祭り
琵琶町公園にて毎年開催しているお祭りに参加。事前準備から参加し、当日は町内会の方々が行うイベントの司会進行、ヨーヨー釣りやストラップアウトなど屋台のお手伝いを行った。

2011年 3月11日
東日本大震災発生

・2012年3月 宮城県南三陸町
→兵庫県立大学の活動の延長として派遣・傾聴活動等を実施

・2014年6月～2016年11月
兵庫県南あわじ市町内
→兵庫県南あわじ市の防犯パトロールプロジェクト。防犯視察の大切さを学びつつ、現在観光スポットに

・2019年2月9日 広島県安芸郡坂町
→復興支援活動として、派遣や互換の機会や傾聴活動を実施

・2020年3月 釜手県立大学復興支援センター
→釜手県立大学FROMさんと交流を行い、「学生団体だからできること」についてディスカッション。釜手県立大学や東日本大震災津波伝承館で復興学習。

創設期
・2011年11月 計4回のボランティア活動を経てLANが発足
・2012年2月【LAN第1次派遣活動】(宮城県)
・2012年3月【留学生視察】
・2012年8月【カフェ建設】(～13年3月)
NPO法人 野馬土のコミュニティカフェ建設支援から福島の復興支援活動が開始。4回の派遣を経て完成。
【農業支援】
春先にジャガイモの種手を植え、夏に収穫し、学祭等の屋台料理で販売することで、福島の魅力を伝え、福島で農業ができるようになったことをアピールした。
・2021年3月【オンラインボランティア】
東日本大震災の発生から10年の節目にオンラインで開催し、これまでの活動を振り返ると共に継承の課題やボランティアの意義等について触れた。

支援
【継続的な福島への訪問】
東日本大震災の発生から現在まで毎年夏に福島を訪れ、現地の農作業体験や震災学習などを行う。これらの体験を通じて、「災害時に役立つ人材をつくる」というモットーを達成すべく活動している。

コロナ禍から現在

能登半島ボランティアの活動経歴

●2024年
3/23～26 (やさし足湯湯)
3/22～24 (ワカモノテカラプロジェクト)
4/27～29 (能登応援サークルネットワーク)
9/30～13 (先生へ一歩)
●2023年
9/23～25 (能登応援サークルネットワーク)
●2022年
3/12～15 (先生へ一歩)
8/16,17 (1.17希望の灯り)
9/15～17

これまで延べ50人を能登半島へ派遣

能登派遣まとめ

「被災地支援」と聞くとどうしてもハードルが高いように感じてしまいがちですが、実際はそのようなことは無く、素人でも現地での支援ができることは沢山ある。だから多くの人にはぜひ1回被災地を訪ねてもらって現状を知ってもらうことが何より意味のあることではないかと感じる。社会人になると訪れる機会も少なくなるので、比較的時間のあきうちに被災地支援の経験をするには有意義であると感じる。

ボランティアを通じて、各学部の専攻からみた感想・意見

国際商経学部
被災地の復興には行政の支援が不可欠と感じた。経済的な観点では、まず助けが必要。交通網が整い、店舗が営業できれば、購買活動を通じて間接的な支援が可能だから。ボランティアだけが支援の形ではない。東北でも民間企業が問題になっているが、安全性を伝え、実際に商品を購入して使うことも支援の一環となる。我々の団体も今後、その姿勢を活動で示していきたい。

理学部
私がボランティアに行ったのは2024年4月であった。震災からは1か月経っていたが、現地の道路状況やライフラインなどがほとんど被災直後のままであったことが強く印象に残っている。家屋の修理の手伝いを見たが、ごみの分別がとても難しく、また量が多いため、高齢者が多く被災地域では個人の復旧作業も困難であることを感じた。

環境人間学部
ボランティアで大切なことは大きく被災地に貢献しようとするのではなく、被災した方々とのコミュニケーションなどがまず必要であることを再認識した。

社会情報学部
行政が被災者の声を聴く方法に課題があると感じた。匿名で匿名での調査を行うことができないため、心情的な配慮を求められる必要がある。匿名な支援をするために個人情報が必要かもしれないが、遠隔地では個人の特色が容易であるため匿名では適切ではない。したがって行政側に要請記入用紙やフォームのQRコードを設置し、「現地で」の支援」に限定して活用してほしい。

工学部
地震では古い家屋や耐震性が低い建物が危険とされるが、能登半島復興地帯に建てられた新築の家では、地震に耐えた家にも大きな被害が及んでいることに衝撃を受けた。いかに安心安全な建物を建てて、減災のための設備を作るか、危険が迫っていることとどう伝えるかを考えさせられた。

看護学部
能登の方々に直接お話を伺う中で、私たちが話を聞いてくれること自体が喜ばれと語られる方がいた。このことから共感して傾聴していくこと、そして能登の方々の思いを伝えたいことを再認識した。

神戸を拠点にする災害復興支援団体、兵庫県立大学の学生団体として

兵庫県は今年で「阪神・淡路大震災」から30年を迎える。LANは東日本大震災をきっかけに設立されたものの、兵庫県を拠点としているため、阪神・淡路大震災の記憶にも取り掛かっている。神戸の震災復興を助けてきた経験も、地域の防災訓練などで伝えてきた。災害時に役立つ人材をつくることを団体理念に防災教育を重ねる中で、ただ知識を学ぶだけでなく自ら考え、仲間とともに行動する力を大切にしている。過去の経験を忘れず次の世代へつなげる。その思いを胸に、能動的に動き先導する姿勢を持ち続けることが、災害に強い社会を築く一歩となる。私たちの活動はまだまだ少ないが、その積み重ねが未来につながることを信じている。

Instagram ID: @uoh_lan
X (旧Twitter) ID: @uoh_LAN

活動紹介セッション

出展団体⑪

兵庫県立舞子高等学校



兵庫県立舞子高校環境防災科です。

私たちは、インタビュー班と防災カレンダー班の2つに分かれて活動をしています。

インタビュー班では、毎年、舞子高校に着任された先生方に阪神・淡路大震災当時についてインタビューを行い、この冊子にまとめています。防災カレンダー班では、災害時に大切な行動や災害の備えなど、自分の身を守る情報を伝えることを目的としてこのカレンダーを作成しています。

全世界の皆さんへ。私たちは、このような取り組みを行っています。気になる方は「舞子高校環境防災科」で検索してみてください。舞子から世界へ。

待ってまーす。イエーイ。



活動紹介セッション

出展団体⑫

帝京大学 社会安全技術研究室



私は、阪神・淡路大震災の発生から30年の時間経過の中で培われてきた知見や教訓の真髓を継承しながらも、今後は新しい技術や方法などを組み入れながら、「地域を伝える力」が未来を変えるというテーマで、地域防災力と災害対応力の強化に取り組んでいます。例えば、避難情報について、これまで、居住者に対して情報が「伝わる」ことに重点が置かれてきたことに加え、新たに、上空を飛行するドローンからの音声により主体的に「伝える」ための技術確立を目指して社会実験を行っています。また、ハザードマップを「見る」だけでなく、簡易のプラスチック容器等を用いて立体的に地図を「作る」というアクションを加えることで、地域形状の理解を踏まえて災害に備えるという取り組みも行っています。災害発生からの時間経過に伴い、「未災者」が「被災者」へ伝えるフェーズに入っている被災地も多く、今後は「伝え方の変革」にも挑戦していこうと思います！

地域を伝えるチカラが未来を変える
 -The Future of Disaster Communication Starts Here-
 帝京大学+人と防災未来センターResearch Fellow 坪井望太郎

<p>見る ⇒ 作る</p> <p>透明プラスチック容器蓋を用いた地形模型 地図と地形で考える地域のカタチと防災</p> <p>地域と地形を「立体」3Dで考える 地図と地形から災害リスクを考える 油性マシク1本で作成可能！ ・子供から大人まで ・海外でも実施</p>	<p>伝える ⇒ 伝わる</p> <p>災害時DRONEの活用とパイロット養成 避難誘導・救助要請等のPUSH型支援</p> <p>DRONE搭載スピーカーとカメラを 適用した避難誘導と救助支援</p>
<p>災害Curationプログラム 当時の写真等をもとに被災者から未災者へ</p> <p>被災者 ⇒ 未災者</p>	<p>地理情報システム (GIS) による災害記録 経験・知見・技術の継承</p> <p>阪神・淡路 ⇒ 全国・世界</p>

活動紹介セッション

出展団体⑬

U35防災ゼミ



皆さん、こんにちは。U35 防災ゼミです。

私たちは、昨年、2025 年から活動を始めました。私たちは、前防災担当大臣の防災ゼミをきっかけに、若い人たち、アンダー 35 の人たちが防災について意見を交換したり共有したりする場、そんな場を求めてこの団体を設立し、ゆるくつながっております。

主な活動は4つありまして、まず1つ目に、防災に想いのある若者のネットワークを構築すること、そして、その参加者同士がコラボレーションできるような場をつくっていく、そして、ゼミを通じた勉強会での知見の共有、最後に、防災の、若者の視点で課題を発見したり解決をするような提言をしていこうというのを活動の柱としています。

現在、31 人のメンバーが参加してまして、若者を中心にさまざまな機関のメンバーが参加しています。

ぜひ皆さんも、Slack で活動してますのでご参加ください。

U35防災ゼミ

前防災担当大臣「防災ゼミ」をきっかけに
若者が分野や所属を超えて繋がり
知見を交換したいという想いが結集。

Under 35才 参加費 無料

主な活動内容

- ・防災に想いのある若者のネットワーク構築
- ・防災を通じたコラボレーションの推進
- ・ゼミを通じた知見の共有
- ・若者視点での防災の現代課題の整理と提言

参加メンバー

人数 31名 年齢 17-33才

所属

学生 高校生 大学生 大学院生	企業・法人 シンクタンク コンサル ゼネコン 製造 経営ベンチャー	NPO 通信 気象 中関文庫法律 普及・啓発	研究機関 国立研究開発法人 民間研究所
--------------------------	---	------------------------------------	---------------------------

※2024年1月現在

U35 防災ゼミ
ゼミはslackにて運営しています。U35の方はお気軽にご参加ください。まずは、自己紹介をお願いします！

Slackはこちら

活動紹介セッション

出展団体⑭

神戸市立福田中学校



1 minute speech



神戸市立福田中学校です。
 私たちの活動は、身近な場所の通学路の「見えない危険」を見える化し、地域の防災意識を高めることが目的です。
 家族で見て知って、考動を広めるぞ。オー。





パネルディスカッション「Beyond 30+ を考える」

《コーディネーター》

BEYOND 30+ (メモリアル・コンファレンス・インKOBÉ) 企画実行委員会副委員長
京都大学防災研究所 巨大災害研究センター 准教授 中野 元太さん

《中野先生のサポート役》

人と防災未来センター 研究部 研究員 南 貴久さん

《パネリスト》

国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°	加藤 光明さん	
兵庫県立尼崎小田高等学校	池田 彩乃さん	
TEAM-3A	奥田 彩世さん	
兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	長谷川虎粋さん	
メディア関係：ラジオ関西ビジネスソリューション局		西口 正史さん
行政機関：神戸市職員（兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科）		福田 敬正さん
学術関係：神戸学院大学 現代社会学部		寺井 美紀さん
民間企業：株式会社G K 京都		横山 愛子さん
人と防災未来センター：副センター長		高見 隆さん

開会挨拶

- **司会** お待たせいたしました。それでは、パネルディスカッションを始めます。

今回のパネルディスカッションのテーマは「BEYOND30+ を考える」です。これまでの30年の歩みの中で紡がれてきた様々な問いを、これからの未来へ向かうチカラへとつなげていく、そんなアイデアや活動を提案・共有し、参加されている皆様一人ひとりがご自身の可能性をさらに広げていくきっかけを考えていただく時間にしたいと思います。本日は、多様な背景を持つパネリストの皆様にご登壇いただきます。そして、せっかくの機会ですので、会場の皆様にも、ぜひ一緒に考え、ときにはご意見をいただきながら、今日ここから始まるメモリアル行事の第一歩を皆様とともにつくっていただければと思っています。

- **司会** ここからの進行は、コーディネーターの中野先生をお願いいたします。

- **中野先生** 紹介いただきましてありがとうございます。



中野副委員長

ここからは、大体1時間少しですが、ここにいる皆さん、それから会場にいる皆さんにもいろんな意見を出していただこうと思っていますので、ぜひご参加いただければと思います。

阪神・淡路大震災から31年という時間が経ちました。31年という、例えば、当時30歳だった方っていうのは、今、60歳になってるわけですね。それと、30歳の頃に体験したそのときの記憶をすごく鮮明に覚えていらっしゃる、そういう世代の方も当然まだまだいらっしゃいますよね。

それから、31年前に子供だった世代も、今、大人になってますね。だから、当時3歳であっても、当時のお母さんの血まみれの顔とかをすごく鮮明に覚えてる、そういう子供たち、今、大人になった子供たちもいるわけですね。そして、もちろん生まれていない人たちもいて。そういういろんな世代の記憶が、今、入り混じってるっていうのが、まさに31年という時間だと思っんですね。

そうすると、奥村先生の最初のお話にもあったんですけど、メモリアルをどういうふうこれからつないでいくのかっていうことが、もういろんな人の意見が入ってくると、どうしたらいいんだろうってなかなか難しくなっ

パネルディスカッション

てくる。それをどう我々は越えていけるのかということが、これから10年かけてみんなで考えたいことだなというふうに思ってるんですね。

この「メモリアル・コンファレンス」、そして「BEYOND30+」というキーワード、このタイトルに入ってますけども、お互いに何となく相矛盾する言葉が入ってるわけですよ。何でもかと言うと、これ、10月にワークショップをやった話を最初にしてましたけど、そのときにも意見が出たんですけど、メモリアルっていうと、振り返るっていう話ですよ。でも、我々みんなでやりたいことって、これからの災害を減らす、命を守る、どうやってつないでいってかという未来の話をしてるよね。だから、過去を見ながら未来をどうつくっていくかってすごい難しい話だよっていろいろな悩みがこの前のワークショップで生まれ、そして、このタイトルに落ち着いたということになっています。

ですので、今日のパネルディスカッションは、まさに、これから未来を我々は一緒にどうやってつくっていくのかということと一緒に考える時間にできたらいいかなというふうに思ってるんですね。

前置きはこれぐらいにしまして。一番最初は、登壇してくださっている皆さんに短く自己紹介をできればいいかなと思っております。

私も、では一応、自己紹介をしますけども。

私は、京都大学の防災研究所で教員をしています中野といいます。

私は小学校1年生のときに阪神・淡路大震災がありまして。神戸の出身ですので、その体験をしていますが、そんなに大きな被害はなかったんですね。ただ、今日来ている舞子高校環境防災科を卒業しまして、その後、実はこのメモリアルアクションのもっとも前の「災害メモリアル KOBE」のときにも登壇をさせてもらったりとかして、ずっとこのイベントに関わらせていただいているという状況です。

今回は、一応この10年間ですかね、副実行委員長をすることになりました。よろしく願いいたします。では、南さん、よろしく願いします。

- 南研究員 こちらの人と防災未来センターで研究員をしております南 貴久と申します。



南研究員

私は、今32歳で、阪神・淡路当時は1歳だったということで、ほとんど記憶に残っていないという世代になっています。

私は、もともと出身が関東、埼玉県の方で、阪神・淡路大震災については、幼少の頃からいろいろテレビ等で被害の状況とかは知ってはいたんですけど、なかなか関東に居て、実感を持って実際に被害に遭われた方の声を聞いたりっていうような機会はないまま大人になったんですけど。

私が大学に入る直前に実は東日本大震災が起こりまして、関東でも結構大きな揺れを感じて。それで、その後すぐ大学に入ってから、この震災の復興とかまちづくりに関する授業を大学でたまたま受けることができ。その辺があって、災害から立ち直るためにどういったことを考えていく必要があるのか社会と一緒に考えたいなという想いが出てきて、今こういう防災のお仕事をするようになったという経緯があります。

ご縁があって、昨年こちらで研究をさせていただくということで、初めて関西に引っ越しをして、こうやって実際に神戸に住まれてる方々と一緒にこういう場も持つことができ、こういうつながりも生かしながら、今後30年から40年を一緒に考えていけたらいいなと思ってます。よろしく願いします。

- 中野先生 今日は何も気負わずにできたら良いなと思います。

では、後ろの西口さんからいきましょうかね。

- 西口氏 皆さん、こんにちは。神戸にあります兵庫県のラジオ局のラジオ関西というところで働いています西口といいます。今、46、45という感じです。95年、阪神・淡路大震災のときは中学3年生の受験生で。ただ、そのとき私は大阪に住んでました。神戸に来たのは、働き出して大学を出てからです。

被災した経験は全くなく、自分が中学のときの思い出としては、その1日だけが休みになって、次の日からは受験勉強やったなというのを今も覚えています。先生だけがポートアイランドに住んでいて、出てこれないって

パネルディスカッション

言うてる中でしたけども、受験勉強だけはなぜか続いていったというのが、ずっと残っています。

今、垂水で、僕は被災者の目線ではない立場でそのラジオ関西というところに入って20年ほどニュースの仕事をしました。今は、またちょっと立場を変えているわけですけども。そういう意味では、自分は被災者ではない自分が取材して良いんかなって思いながら、常に20年やってきてます。そういう中で言うと、皆さんに近い立場なのかなという気もしてるので、今日はいろいろお話し伺えたらと思っております。よろしくお願いします。

- **福田氏** どうも皆さん、こんにちは。福田と申します。先ほどご紹介いただいたとおり、普段、神戸市の職員をやっております。あと、私は今、兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科というところで防災の勉強をしております、主に伝承の研究をしようとしております。

私は、阪神・淡路大震災のときは中学2年生、奥村先生と同学年ですね。松坂世代と言うと、もう同学年しか全然ウケないんですけども。

当時は、鷹取というところにいまして。震度7の一番西の端になりますね。あれは非常にひどい被害になりました。通っていた中学校も、2千人を超える大きな避難所になりました。1学期の間は避難者の方と一緒に生活をしながらの授業という、そういう特殊な環境にありました。

ちょうど10年ぐらい前から防災の活動に関わらせていただくことになりました。今回は偉大な先輩から、このメモリアル企画委員のバトンを受け継ぐ形になりまして参加させていただくことになりました。私は被災の経験がありますので、それを何とか生かして未来につなげていくということをやっていたらいいなと思っております。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

- **寺井氏** 神戸学院大学現代社会学部社会防災学科の実習助手室というところで仕事をしております寺井と申します。

私は、阪神・淡路のときはまだ生まれていないので、震災経験もありません。今の仕事の前は全く違う業界で東京の方にいたんですけども、働いておりましたので、正直、ここにいる皆さんの中で一番防災に関わりがなかったというか、そんなところかなと思ってます。

ただ、中野元太さんもおっしゃってましたが、舞子高校の卒業生、環境防災科の卒業生で社会防災学科を卒業しておりますので、学生の頃はよく防災と触れ合ってきたかなと思っております。ただ、社会人になってからは、あんまり防災のことを考える機会がなくて。ただ、こういうメモリアルの場所に呼んでいただいて、改めてこの歳になって防災について考えて、大切な人の命を守っていくということに関してしっかり考えていきたいなと思っています。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

- **横山氏** GK 京都の横山と申します。



株式会社GK京都 横山氏

私は、震災当時は小学校4年生だったんですけども、全然関西には住んでいなくて、福岡県の北九州というところで普通に小学生をやっていたので、阪神・淡路大震災のことは、テレビの中の大きな震災としてニュースなどを通して知ったというような感じです。

普段の仕事は、GK 京都というデザイン会社の中で、企業とか団体の人が世の中とかお客さんに対してこういうことを伝えたい知らせたいというようなことを、チラシとかポスターとかいろいろな媒体を通して、デザインを使って知らせる手伝いをしているというようなことを仕事としてやっています。

防災に関しては、このイベントに十何年前ですかね。17年間ぐらい関わらせていただいて、そちらに貼っていただいているようなチラシづくりを通して参加させていただいています。今日はどうぞよろしくお願いします。

- **高見氏** 人と防災未来センターの副センター長をします高見と申します。

私は、阪神・淡路大震災のときは、もう既に兵庫県庁の職員をやってまして。震災の日に職場に行って、それからずっと24年間、防災に関する仕事をしました。人と防災未来センターの整備の仕事も一部やったりしておりました。もう県庁のほうは退職して今の職に就いてるんですけども、もう高齢者ですので、昔話しかできませんけれども、今日はよろしくお願いいたします。

- **中野先生** それでは、次、長谷川君からいきましょうか。

パネルディスカッション

●長谷川さん こんにちは。舞子高校環境防災科3年の長谷川です。僕は、もちろん阪神・淡路大震災も生まれてないですし、東日本大震災の記憶もほぼゼロに近い状態で、防災と関わったのも高校1年生からの3年間ちょっとしか関わってなくて、まだまだ防災・災害の知識っていうのは浅いんですけども、今日は頑張りたいと思っています。よろしくお願いします。

●中野先生 長谷川君は、何で環境防災科に入ったんですか。

●長谷川さん 将来の夢が消防士で、防災に関わりたと思ってたときに、環境防災科は母が見つけてくれたんですけど。そこで本気で防災を学ぼうと思って入ったというよりかは、次につなげられたらいいなと思ってここに入ったんですけど、高校に入って防災を学ぶ中で、本気で防災に取り組むことができるようになりました。

●中野先生 素晴らしいですね。

●奥田さん 野々池中学校3年生でTEAM-3Aに所属している奥田 彩世です。中学生で周りが賢い人たちばかりで緊張してるんですけど、優しく見守ってくれたらうれしいです。

なぜ所属してるかは、来てくださった方々にはポロっと言ったんですけど、幼稚園ぐらいのときに先輩たちの活動に参加者側で参加していて、それで憧れを持って先生に言ったら、快く良いよって言ってくださったので入っています。今日はよろしくお願いします。

●中野先生 奥田さんは、今でも最年少メンバーなんですか。

●奥田さん 今でも最年少。

●中野先生 おー、素晴らしい。

●池田さん こんにちは。尼崎小田高校の池田です。



尼崎小田高等学校 池田さん

防災班というところに所属していて、環境活動の一環として、防災のことを学んだり発信したりしています。

私が防災を学びたいと思ったきっかけは、幼い頃から母に防災の話をしてもらっていたことが主なきっかけです。母は神戸に住んでいたこともあり、震災を経験しました。実際の話を知ると、恐怖だったり怖くなっていう気持ちがすごくあったんですけど、この尼崎小田高校に入って先輩方の実際の活動内容だったりお話を聞いていくうちに、私も調べて発信できる立場の人になりたいなと思い、探求活動に参加するようになりました。

今日はよろしくお願いいたします。

●中野先生 池田さんのお母さんのお話で一番印象に残ってるお話って、どんなものがあるんですか。

●池田さん 母から聞いた話で印象に残っているのが、母の祖母と母のおじいちゃんと4人で生活していたんですが、冬だったこともあり、母の祖母がちよっと体が動けない病気だったので、私の祖母が母の祖母に覆いかぶさるような形で、地震から母の祖母を守ったっていう話を聞いていて、自分の命よりも自分のお母さんを守るっていう行動が私にはちょっと理解できないというか、びっくりしたので、すごく印象に残っています。

●中野先生 なるほど。ありがとうございます。

●加藤さん D-PRO135°の代表しています加藤です。

ちょっと僕個人に対する、すごい防災に対する深い思い入れというのはないんですけど。このD-PROっていう活動自体が、比較的楽観的に防災を見るっていう感じで、防災の怖さとかっていうのを伝えるというよりかは、災害っていうのをすごい怖いものとして見るよりは、防災っていうのを楽しくやっというのを。「実は防災って楽しい」という言葉をテーマに活動しています。

なので、ゲームを作ったりとか。僕が特に力を入れてきたのが「地域交流」っていうところで、小学校に行かせてもらったりだとか、あとは地域のイベントへ参加させてもらってるんですけど、そういったところで子供たちは楽しんでくれたりとか。あと、グループで活動している中で、高齢の方とか大人の方っていうのは、防災を考えながら実際に自分の阪神・淡路大震災の経験っていうのを伝えてくれてる部分もあって。そういったところで、自分の知識にもなるし、活動しながらちょっと自分の活動の方針っていうのが定まってきたところもあります。



パネルディスカッション

なので、そういったところで、地域防災っていうのはすごい大切だなというのは、活動しながら感じてきました。そういった面から、今日もディスカッションに参加していければいいと思っています。よろしくお願いします。

- **中野先生** ちなみに、代表というのは、D-PROはどうやって決まるんですか。今、何代目なんですか、D-PROの代表というのは。
- **加藤さん** ちょうどD-PROが結成10年になって。きっと毎年1回変わってると思うので、10代目ですかね。
- **中野先生** 手挙げ制、それとも推薦制ですか。
- **加藤さん** あー、何とも言えないですね。
- **中野先生** 何となく決まるんですね。
- **加藤さん** そうです。意外とすんなりと決まるような感じです。
- **中野先生** なるほど。これが、今の高校っていうか、若者の決め方っていうことの、一つの例ですかね。
- **加藤さん** そうですね。はい。いや、分からないですけど。
- **中野先生** ありがとうございます。

今、皆さんに自己紹介していただきました。会場の皆さん、お手元に白い紙をなぜか配られたかと思います。ぜひそれをちょっとお手元に出していただいて。河田先生のところにも、白い紙をぜひ。1枚お持ちいただけると大変ありがたいですが。

この1枚の紙には何を書いてほしいかと言いますと、「BEYOND30+」。30年を超えてこれからを考えていく際に、これから未来を考えていく際に、「大切にしたい言葉」あるいは「大切にしたいこと」を書いてみてください。大きく書いてください。A4いっぱい使って書いてください。絵で描いても大丈夫です。分からなければ白紙でもいいし、大きなクエスチョンマークでもいいし、パッと頭に思い浮かんだ言葉を書いてみてもいいです。

書いていただきながら、パネルディスカッションに参加するパネラーの皆さんには、既に書いてもらってるんですね。なので、それをいっせーので出してみましようか。

では、いきますね。いっせーので、パツ。

「コミュニティ」「しっかり噛む」。

「感謝」「自分事として考える」「つながって」「ついでに防災」それから、「いつでもどこでも誰でも」。それから、「自然とそうなる形をつくる」「気楽」、温故知新を「温故動新」にするということですかね。

じゃあ、皆さん、ちょっと手元で書きながらになってしまいますけども、ちょっとずつ聞いていきましょうか。

まず、高見さん、この「温故知新から温故動新」というのは。

- **高見氏** 「温故知新」というのは、古きを訪ねて新しきを知るという意味で、これは人と防災未来センターについて書いたんですけども。阪神・淡路大震災のこと、経験と教訓をここで学ぶ。それに基づいて、今の直面している課題について考えるという意味なんですけど。「考える」で止まったら駄目やなということで、「動く」という字に変えたらどうでしょうという提案です。皆さんぜひ、学んだことを行動に移すっていうことでやっていただきたいなということです。
- **中野先生** ちなみに、行動に移すためには、この人と防災未来センターでどういう役割を果たせそうですか。
- **高見氏** それは、最後のBEYONDのところで開催したいと思います。
- **中野先生** ありがとうございます。行動に移すという、「動」が大事だということですね。
他、誰にしましょうかね。寺井さんは「つながって」、「つなぐ」。お願いします。
- **寺井氏** 「ついでに防災」です。
ちょっと私、ずっと悩んでたんですけど。まず、その「つながって」というところで。今日、たくさんのパネルディスカッションしていただいて、それを聞いたときに、それぞれ皆さん素晴らしい活動をされていてすごいなと思ったんですけども、それをもっと外につなげて全然防災に興味がないような人たちともつながって、で、ついでにその防災活動みたいなのを、防災のない団体とか企業とか組織と一緒にやっていくみたいなことができれば、もっともっと広がっていくんじゃないかなと思っていて、その意味を込めて、ついでに。「つながって、ついでに防災」としました。
- **中野先生** それで、加藤君の「コミュニティ」とも、それは結構つながるところがあるんですね。

パネルディスカッション

どうですか、加藤君の「コミュニティ」というのは、どういうコミュニティを指していますか。

- 加藤さん 「コミュニティ」って、自分の中で思い浮かんだ概念的なものが言葉に表されたのかどうか分からないですけど。「コミュニティ」と一言と言っても、別に何か特定のものを指すわけじゃなくて。僕のイメージとしては「人と人のつながり」とか。さらに、つながってできた団体と団体のつながりみたいなところで。一つは、この「BEYOND 30+」というものが一つのコミュニティであるっていう、その自覚が大事かなっていうふうに思いました。



明石高専 加藤さん

もう一つは、「BEYOND 30+」を出た先で、今回来るところで、学校、企業さんとか他の研究団体とかいろいろありますけど、そういったところっていうのは、やっぱりそれぞれの団体で分かれてる地域だったりとか他の企業とかっていうところでつながっていったらと思います。

だから、そういった「コミュニティ」から「コミュニティ」へのつながりっていう部分で、この「BEYOND 30+」という活動が、この中でとどまるんじゃなくて、その外につながってほしいという。つまり、実際につながっているんだなっていう意識を持って展開して活動していけばいいのかなというふうに思いました。

- 中野先生 まさに、もう既にこの BEYOND 30+ のこの場所も、もう「コミュニティ」として感じてくれてるっていうのは、主催している我々としては、もう大変うれしいコメントです。まさにそれを我々は目指してやっていて。もう 10 年後には、このコミュニティがこの部屋には収まらないというふうになってるのが、目指すべき私が考える方向かなと思っています。

南さんはどうでしょう。どこに聞いてみたいですかね。

- 南研究員 そうですね。奥田さんに。若い意見ということで。「いつでもどこでも誰でも」っていうのは、どういったことでしょうか。

- 奥田さん 「いつでもどこでも誰でも」で。私が所属してるところがもともと TEAM-3A で、こういう意味を持ってるんですけど。それもあつて、「誰でも」っていうのが私的に大事だと思って。今、やっぱり高校生の皆さんが多かったり、高校生以上の皆さんが多いイメージがあるんですけど、もうちょっと中学生の仲間が欲しいので「誰でも」っていうのを入れました。

- 南研究員 ということは、寺井さんの「ついでに」、興味がない人にも「ついでに」っていうところとも、何かつながっていきそうな話かなと思って、今、お聞きしていました。

- 中野先生 横山さんは、「自然とそうなる形をつくる」っていうことですね。これは、どういうことで書かれましたか。

- 横山氏 ここに書く言葉、もう一つ迷っていて。最初に奥村先生が説明された中に「防災はとにかく仲間をつくらな」とおっしゃって、そうだなとそこはすごく共感して。じゃあ、そう思うためにどうしたらいいんだろうみたいなことを考えていくんですけど。先ほどのセッションの中で、大学生の方が言われてた言葉が、この「自然とそうなる形をつくる」って言って。誰かにこうしてほしいとか、この活動に参加してほしいとか、防災、家の家具固定してほしいとか、そういうことを押しつけるんじゃなくて、自然とそうなる形を考えたり仕組みをつくるみたいなことが大事なのかなって私も共感して。普段の仕事とも通じる場所があったので、この言葉にしました。

- 中野先生 これは、肩肘張らずにっていうか。

- 横山氏 そうですね。

- 中野先生 まさに「気楽に」って書いてくれる長谷川君、どんなふうになると気楽に参加できるんですかね。

- 長谷川さん 僕自身は緊張したら頭がもう回らない言葉も出なくなってしまうので。でも、ワークショップの形で、ほんまに気楽に話しかけてくれたりしたら自分の意見もスイスイ僕は出るので。ほんまに個人の意見なんですけど、気楽に話したら、人間やっぱり良い意見も出るんじゃないかなと考えました。

- 中野先生 それは、発表会みたいな場所よりは、例えば今日やってるみたいな。こういうポスターの前で、ちょっと、雑談みたいに話すほうがいいかなっていう。

- 長谷川さん そうですね。はい。

パネルディスカッション

- 中野先生 そうなんです。分かりました。

ああいうポスターセッションも、31年目になってちょっと取り入れた方法だったので。これからどんどんやっていきたいなということですね。

そして、「自分事として考える」。まさにこれ大事ですね。

「自分事として考える」、どうしてこれを書きましたか。

- 池田さん 私が活動を続ける中ですごく思ったことが、見てくれる人とか来てくれる人っていうのは、もともと防災に興味を持って集まる方が多いなっていうふうに感じていて。興味がない人っていうのは、そもそも足を運んでくれないんです。そういった方にどうしたら考えてもらえるだろう、来てもらえるだろうと思ったことが、結果的に、自分事として考えてもらわないと足を運んでもらえないのかなっていうふうに思ったので、この言葉を選びました。

- 中野先生 では、もう自分事として考えるには、どんなことが大事になってきますかね。難しいですね。自分事として考える。

- 池田さん とにかく、まずは過去の話聞くことが大切なのかなと思っていて。なぜ防災をしないといけないのか、なぜ防災が必要なのかっていう根本的な理由を理解してもらわないと、防災にはつながらないのかなと自分は思ってるので。まずは、とにかく話をしに。こちらからしに行くっていうのが大切じゃないかなと思います。

- 中野先生 まさに池田さんの場合は、家庭の中にそういうお話を聞く機会がたくさんあったけども。そういう場所は、本当はもっと外にもたくさんあるといいな、そういう感じですね。

では、まだ話を聞けていない。福田さんは、「感謝」。

これは、なぜ「感謝」でしょうか。

- 福田氏 これは、私自身が防災をなぜやるかというところで。被災した当時はいろんな方から支援を受けたというところ、その感謝の念が尽きることがないんです。その後は、返すためには何をしなければいけないのかなと考えたときに、このような悲劇を繰り返さない。次には、これを減災につなげるということですかね。そのために、当時の経験を伝承していつか次の災害に備えるということで、「感謝」。

恐らく神戸でその被災した方々というのは、他の被災したところに対して何かしら支援したいと、この「感謝」の想いが強いのか。防災をしていく原動力というのは「感謝」ではないかなということと、これは、コミュニティとかつながりのお話も出しましたが、そこにつなぐとか。この「感謝」というところが、一人ではいろんな災害には太刀打ちできないし、助け合うことができない。この「感謝」という言葉の裏には、そういったいろいろなつながりであったりとか。そういった、一応、想いを込めて書きました。

- 中野先生 じゃあ根底には、いろいろこう、つながってますよね。今の福田さんのお話と。まさにコミュニティ、こう、つながって、そして誰でも参加できるような、そういうような空間ですよね。

さあ、最後になってしまいましたが、西口さんは、一番気になったんですね、これ、一番最後に残したんですけども。美味しいところは最後に残すという。

- 西口氏 「しっかり噛んで」。

- 中野先生 はい。「しっかり噛んで」

- 西口氏 ごめんなさい。ちょっと抽象的な。大事にしたいなという形にしようというか、「しっかり噛む」ないし書きたかった言葉で言うと、「急いで答えを出さない」というか。

本当に20年間、記者としていろんな。僕は経験してなくて、経験した方々のお話を聞いて。それを、神戸の放送局ですから、被災した人たちにに向けて発信するっていうときに、非常に何だろう、そこで話聞いて、ああ、大切なことだ、伝えないとって言って、すごく急いで急いで答えを出した時期もありました。

10年、20年経って、自分が22,3の頃から自分が40近くなって、で、結婚して子供ができたとかって自分の変化も含めたときに、20年前に聞いた言葉がもう一回違う意味を持って聞こえてくるとかということがちよいちょいあって。やっぱりそういうときに、自分が聞くとか学んだ、今日もたくさんいろんなことを知れて楽しかったですけど、それが、寝かせることでまた違う響きが出てくるなっていうことが多いので。何かそういう意味で言うと、

パネルディスカッション

急いでこれはこういう意味なんやって、それで評価を固めてしまわんと、いつまでもクチャクチャ食べてんのも行儀悪いんですけど、しっかり咀嚼し続けることが自分の中の体になっていって、何か気軽なというか、煮詰めに何か考えることにつながればいいなという、そんな思いを。20年かけてやっと来たかなという感じです。

●中野先生 その境地にたどり着くには、20年の時間が必要。

●西口氏 はい。たくさん勉強しました。怒られました。

●中野先生 そうですね。でも、それが、ある意味で、本当の意味での、自分事として考えるというか、ストンと腑に落ちるといふか。そういう時間も必要っていうことですね。

どうでしょう、会場の皆さん、大体書けましたかね。

今からいっせーの一でとまた言いますので、皆さん、ちょっと高々と上げてもらっていいですか。それではいきます。いっせーの一で、ホイッ。

書いてなかったら、もう白でも。白でもいいですよ。

南さん、まず何か、ちょっと聞いてみたいものありますか。

●南研究員 そうですね。一番目の前で、ちょっと。BEYOND 30+ に対するアンサーかなとちょっと思ったんですけど。気になるので聞いてみていいですか。

●中野先生 まず、何て書いたかも読んでもらっていいですか。

●参加者 はい。兵庫県立大学の芦田と申します。私は、「Among」と書かせていただきました。

こちら英単語の意味としては、確か、何か三つ以上のもの間でっていうふうな意味だったと思うんですけど。何か、まあ今だったら、ここに参加している皆さんの間で、何かこういうふうな感じで情報とかそういう成果を共有し合ったりとか。ないし、それがますます発展していけば、兵庫とか日本とか、そういった結構大きいものの中で何かそういうものが飛び交うようになればいいのではないかなということで、この「Among」というものを書かせていただきました。

●中野先生 ありがとうございます。

●南研究員 「コミュニティ」とか「つながって」とかっていうところとも、何かリンクしていきそうなキーワードかなと思いました。

●中野先生 皆さん、もう一回出してもらってもいいですか。

どうでしょう、寺井さんとか、何か聞いてみたいものありますか。

●寺井氏 一番目についた「楽しさにつながる活動に」というのが、すごくきれいに書かれて目についたので。よろしいですか。防災って、結構、楽しさと相反するところもあるのかなと思ったので。

●参加者 「楽しさにつながる活動に」と書かせていただいたのは、これからの10年間をこういう活動をしてい



けたら良いなというふうに思ってるんですけども。僕も、楽しいことってどんどん続けていけますし、この防災の活動って、何か筋トレみたいだと思ってるんですよ。自分も筋トレで、俺の大胸筋育ってきたなみたいに、楽しみがあるじゃないですか。

でも、こういう部分があると思って。自分が強くなることって、きっと楽しいことにもつながるしというので、こういうふうに書かせていただきました。

楽しいって、ね、唐突ながら、僕も楽しいです。いろいろ言えそうだなと思ったので、ここに書かせていただきました。

●中野先生 やっぱり大事にしたいことのためには、結構、つながっていくということがすごくやっぱり多いですね。そういうところはみんな、共通の何か方向性を持つてるのかなと思いました。

もう一回、皆さん、出してもらってもいいですか。

じゃあ、福田さんにも。福田さんが気になってるものは、どれですか。

●福田氏 そうですね。パッと見たときは、河田先生と一緒にちょっとうれしかったんですけど。

「縦型防災」というのは、ちょっと気になりますね。それ、どういう意味なのかなって。

●参加者 「縦型防災」と書いたのは、意味というか、想いが二つあって。

パネルディスカッション

一つ目は、震災を経験していない若者が、こういった防災について考えられるかなと思ったときに、インスタグラムとかYouTubeのショート動画とかリール動画をすぐスワイプして観れる「縦型動画」やったらすぐ観れるし、わざわざ専門家の人がやってるサイトとかに飛ばなくても観れるかなっていうので「縦型防災」って書いたのと、年代を越えて縦のつながりとかいう意味で「縦型防災」という言葉を選びました。

●福田氏 素晴らしい。

●中野先生 ちなみに、防災アプローチさん、「縦型防災」の映像のプロですよ。そこのところはどうですか。どうやったらバズるといふか。若い人たちにたくさん観てもらえる動画になっていく。まあ、そのキーワードに「縦型」は、ありますか。

●防災アプローチさん もうまさに「みんなでつくる防災・減災」というYouTubeチャンネルで動画をあげてまして。最大一つの動画で500万再生ぐらいされてまして。もう若い人はもちろんなんですけど、今、テレビでも縦で動画を観るみたいな方も増えてるようでして。



防災アプローチ 山部さん

やっぱり今、インスタもそうですしYouTubeもそうですし、縦の動画って興味なくとも流れてくるんですよ。どんどんスワイプ、スライドしていく。

ですので、これ、本当に、今後、絶対必要になってくるコンテンツかなと思いますね。

●中野先生 「縦型防災」ありってということですね。いいですね。

ぜひ河田先生にも。「感謝」と書いていただいたので。

●河田センター長



河田センター長

皆さんご承知のように、今年の終わりには、政府に防災庁ができるんですね。南海トラフ地震が想定どおりに起こると、日本は潰れると。間違いなく潰れるんですよ。その危機感が政府と共有できるっていうのは、とてもうれしい。

僕は防災研究も今年で51年目なんですけどもね。南海トラフが起こったら日本が潰れるっていう危機感を持ってるので、防災庁をつくってほしいって、ずっと言ってきたんですよ、30年間。そうすると、石破首相が首相になったときに、防災庁をつくるって約束していただいて。僕は首相官邸でもそのお礼を申し上げたら、実は昨年10月でお辞めになって高市さんになったじゃない。

これでもう駄目になるかと思ってたのですが、この12月1日に首相官邸で高市首相とお会いしたときに、防災庁をつくりますっておっしゃっていただきました。ということで、今の予定では、この11月に新しい防災庁ができることになっています。ですから、それをまた出発点として、この防災の取組をより効果的なものにしていただきたいと思います。もう、私にはそういうことはできませんので、皆さん若い人が頑張ってやっていただけたらと思って。この51年間の防災研究ができたということに非常に感謝しているということをお伝えしたいと思います。

●中野先生 ありがとうございます。

どうでしょう、では加藤君にも聞いてみたいんですけども。何か気になったことがありましたか。もう一回上げてもらいましょうか。

●加藤さん 何かうちのメンバーだけ白紙・・・。

●中野先生 いや、でも白紙にも多分、意味があるんですよ。白紙の意味を聞いてみましょうか。

どうでしょう。白紙、書けなかった。まだまだ難しい感じですかね。どうぞマイクを。

●参加者 問い、もう一回いいですか。

●中野先生 ああ、問いですか。ああ、問いは、えー。

●参加者 それが大事なんや。もう、もはやついて来れない人がいるっていうことです。

●中野先生 あ、そうですね。

パネルディスカッション

震災後 30 年を超えてこれから未来に向かって活動していくために、どんな言葉を大切にしたいでしょうか。どんなことを大切にしたいですか。

●参加者 ……

●中野先生 いや、でも、その沈黙は大事ですね。

そうです、すごく当たり前で。だっていきなり 30 年を超えて、ね、何を大事にされるか聞かれて。いや、普通、難しいのが当たり前ですよ。

だから、白紙で、まだちょっと分かんないなっていうのが、また我々も知るようになって、すごく良かったなと思いますけども。

何か、どういうところが難しいですか。

●参加者 そうですね。難しいっていうよりか、何て言うんだらう。防災だから、それは、その意外に実際に起こる地震に対してしっかり備えていくっていうことが大切なんですけど、今も大切にしっかりしていけないといけないから。で、これに関しては、自分も問いがあんまり理解できてなくて、ちゃんと。答えられてなかったかなという。

●中野先生 なるほど。ありがとうございます。加藤代表、どうでしょう。

●加藤さん そうですね。「BEYOND 30+」というのがこれからというところで、メモリアルアクションでメモリアルっていう、阪神・淡路大震災をどうかっていうところから、今回のイベントで、一気に、未来にどうつなげるかっていうところに大分ターニングしたっていうイメージはあるので。難しいところもあるかなっていうふうには思います。

●中野先生 まさに、未来を見通すっていうか、これから何をしていけば良いかっていうのは、もう非常に考えるのは難しいところはあると思うんですよ。なので、皆さんぜひ、その白い紙の 2 枚目を出していただければと思います。

これまで 30 年という時間を阪神・淡路大震災以降過ごしてきたわけですが、冒頭に申し上げたとおり、いろんな世代が今の社会を生きていて、どうしてもメモリアルという言葉、災害を振り返ってこれからをつくっていくという原動力にはなりにくくなってきているのかなというふうにも感じています。ですのでこれから、31 年目以降、未来に向かって私たちが活動していく中で、まさに未来に向かう力を得るためには、どんな具体的な活動とかが大事になってくるんでしょうかということ、ちょっと考えてほしいんですね。

具体的なと言いましたけど、抽象的でも大丈夫ですよ。皆さん、今、未来に向かってこんな言葉が大事なんじゃないかなっていうことを考えてもらいましたね。それを実現していくためには、どんなことを本当に我々やっていけばいいんだらうか。これから 31 年目以降を過ごすにあたって、どんなことをやっていくと、阪神・淡路大震災という震災に、我々、根を張りながらも、未来に起こる、今おっしゃったようなまさに南海トラフ地震とか津波とか、それから様々な災害の被害を減らすための力になっていくんだらうかということ、ちょっと考えてほしいなと思います。

では、ここをあえて、誰もしゃべらずに 2 分ほど時間を取りたいと思いますので、できればなるべく具体的に。難しければ、抽象的にでもいいですし、絵で描いてもいいですし。難しければ、はてなマークでもいいですし。もっと分からなければ白紙でもいいです。

何でこういうことを言ってるかという、この手の問いを 10 年間していこうと思うんですよ。1 年ごとに、ちょっとずつでも、その活動とか向かう方向が、私たちみんなの中で具体的にになっていけば良いなと思ってるんですよ。だから、この 1 年目は、むしろ白紙が多くても良いかなとも思ってるんです。でも 10 年後に、こんなに変わったんだねっていうふうに見えるようにしたいんですよ。

ということで、静かにしてますので、では今から 2 分ほどでちょっと考えてみてください。

もちろん、これには正解も間違いもないですね。

舞台上にいる方には事前にお題を出したので、大体皆さんは書ける感じではありますけども。ちょっと会場の皆さんも書いていただいているので、もう少し時間を取りたいと思います。

はい、じゃあ、再開したいと思います。

では、まずは舞台上にいらっしゃる皆さんに、またいっせーの一で出していただきたいと思います。

パネルディスカッション

それでは、いっせーの一で、どん。

お、来ましたね。お、すごい。「SNS」「試す」「やる」「誰かを置いていかない活動」「共感」「まず私から挨拶を」「防災ツールクロスロードをやり続ける」「共助」「おはよう防災」ですね。「愛」ですね。高見さん、「愛」ですね。

じゃあ、「愛」からいきましょうか。

では、「愛」。なぜ「愛」でしょうか。これから10年かけて「愛」を育ててということでしょうかね。

- 高見氏 私、ここに集まっている若い人たちに聞きたいんですけど。何で防災やってるんですかっていうことな



高見副センター長

んですよ。

河田先生は、この30年かもっと長い間、南海トラフとか巨大地震が起こったら大変なことが起きると。さっきも、日本が潰れるって脅かしてましたよね。もうずっと何十年も脅かし続けて。それで防災やらそうとしたんですよ。そんなんで私いいかなと。そんなんやったら、もう何か恐怖で人を動かすというのは続くんやろかっていうのがちょっと疑問だったんですね。私は、むしろこっちの「愛」じゃないかなと。

ここの4階に、二つシアターがあるんですね。一つ目のシアターは、地震のときに何が起こったか、家がどんなに潰れたかっていうことを見せて脅かすシアターです。二つ目のシアターは、そこのタイトル、映画のタイトルっていうのは「このまちと生きる」っていうタイトルなんです。このまちと生きるっていうのは、例えば、「しあわせ運べるように」の歌詞の中にも「傷ついた神戸をもとの姿に戻そう」というフレーズがありますよね。そうやってこの30年、神戸の人たちって復旧・復興に取り組んできたんですね。そこにあるのは、やっぱり地域愛とか、ふるさと愛みたいなものだし。

先ほどの発言の中にもありましたけど、家族、おじいさんおばあさんに覆い被さって助けたという。それって、まさに防災そのものなだけで、そこにあるのはやっぱり「愛」じゃないかなと。誰か助けたいと思ったら、やっぱりやるじゃないですか。そういうのがベースにいるんじゃないかなということで、ちょっと書きました。

- 中野先生 ありがとうございます。ぜひ若い人に聞いてみたいって言ってましたね。

この中で一番若い人は誰ですか。一番若いという自覚がある人。

あ、中学生3人。福田中学校ですね。なぜ防災に興味ありました。やってみたいと思いましたか。

- 福田中：男子生徒 防災を学ぶきっかけは、まあ、何ていうか。自分が生きている間に南海トラフが絶対起きるっていう。ニュースで見たので、知っておいたほうがいいかなと思って、やってみました。

- 福田中：女子生徒 震災を体験したことがないので、やっぱこういう場所を借りて防災について学んで次に生かしたらいいなと思って参加しました。

- 福田中：女子生徒 阪神・淡路大震災から30年経って、それで、こんな感じですがすごい変わってきている神戸だけれども、それとともに、記憶がどんどん消えているっていう点もだいぶ怖い。だからこそ、私たちもつなげられるように頑張りたいなっていうことでやらせていただきました。

- 中野先生 なるほど。まさにつないでくれる世代ということで。

どうでしょう高見さん、「愛」を感じますか。

- 高見氏 ぜひ皆さんの家に帰ってから、ご両親に聞いてください。私のこと愛してますかって。愛してるんやったら家の耐震化してって頼んだらいいですよ。

- 中野先生 ありがとうございます。

では、どうでしょう南さん、次、どなたに聞いてみますかね。

- 南研究員 池田さんの「挨拶」っていうキーワードがちょっと気になるので、お話聞かせていただいてもいいですか。

- 池田さん 私は、まず私からっていう「挨拶」というのを選んだんですけど。挨拶を選んだ理由として、私、マンションに住んでいるんですけど、マンションの下に降りると住民の方と顔を合わせて、おはようございます、こんにちわって挨拶をするんですよ。皆さん挨拶をされたら、多分、挨拶を返すと思うんですよ。自然と人って挨拶をされるとしゃべることがあると思うので、あの、顔見たことあるな程度には記憶に残るのかなと思っていて。この場がそういった「挨拶」みたいな感じになってくれたら良いなという気持ちで、「挨拶」という言葉を選び

パネルディスカッション

ました。

- 南研究員 ありがとうございます。(拍手)

さっき高見さんは、大きな「愛」について語っていただきましたけど、池田さんも、「挨拶」の小さな愛からでもやっぱり育んでいくことが防災につながるってことなのかなって、今ちょっと思いました。大変大切なことだなと思います。

ハイタッチともつながりますよね。

- 中野先生 そうですね。ご挨拶できるようになると。

ちなみにハイタッチって、10月のワークショップでこれ書いてくれた子って、います？おー、いましたね。

ちなにもう一回。「ハイタッチ」何で書いたかって、覚えてますか、自分で。

- 参加者 書いたときは、自分が神戸マラソンの経験でランナーの人とハイタッチしたときに感じたランナーの人の想いがすごいなって思っ



た。ハイタッチって、するだけで人と人の想いが伝わるものなんだっていうのを、このメモアクでも使いたいなと思って言いました。

- 中野先生 まさに通じるところがたくさんありますね。素晴らしいですね。

「誰かを置いていかない活動」っていうのも、まさに「挨拶」にもつながっていきそうな言葉ですかね。

どういう理由で書いていましたか、それを。

- 奥田さん グループに全く関係ない私のことになっちゃうんですけど。



TEAM-3A 奥田さん

私の姉がちょっと精神障害を持っていて、ある程度置いていかれるところってあるみたいで。

「置いていかれちゃったー」って、しょんぼりしちゃうので。

そういう人がいなくて、年齢で置いていかれるのは減らしたほうがいいけど、そういう障害とかで置いていかれる人も減ってほしいから「誰も置いていかないように」っていう想いを込めて書きました。

- 中野先生 社会の中にはいろんな方がいらっしゃいますからね。障害を持たれてる方もそうだし、外国籍の方も。今日は外国の人でも途中までたくさんいて、たくさんお話をしてくださいましたが。そういう方たちが置いていかれないような活動っていうのをやるっていうことが大事ですよ。

そういうところでは、「共助」という言葉もつながってくるんですかね。

ちなみに「共助」っていうのは、どうして「共助」にしたんですか。

- 加藤さん 自助・共助・公助っていうのは、まず防災に関わってる人なら誰でも聞いたことがあると思うし、別に、よく最近耳にする言葉でもないかなというふうに思うんですけど。実際、阪神・淡路大震災の教訓とか東日本大震災の教訓とかで普及してきたのって、例えば「地震が起こったら机の下に隠れよう」みたいなことは義務教育でありますし、「津波でんでんこ」って聞いたことあると思いますけど、「津波が来たらもう1人でも逃げろ」っていう。その「自助」の部分っていうのは、一般常識として染みついてきてる部分があって。各個人で災害が起きたときにすることっていう「自助」の部分っていうのはこれまでの震災を通して広まってきたと思うんですけど、阪神・淡路大震災にしても30年と、東日本大震災でも10年ちょっとの次のステップっていう部分で注目されてるのが「共助」かなっていうふうに思います。

これ、自分たちの活動を通してでも感じていて。大体、団体とか学校で呼ばれるんですけど。ただ、そこで個

パネルディスカッション

人的に何をするかっていうよりかは、みんなで何ができるかなっていうところにテーマが移ってきてるのかなっていうふうに思っ

たので、自助・共助・公助って、一般的には、災害が起こった後どういう手順でやってるかっていうところなんですけど。実際、災害の対策、防災っていう部分も、時系列順に自助・共助・公助っていう波が来てるんじゃないかなというふうには個人的には思っ

●中野先生 ちなみに、今の社会という大きいですけども、今って、あんまり「共助」はうまくできてないと思いますかね。

●加藤さん よく防災の話っていうと、例えば、住宅で取っても、マンションになると近所つながりってところは、引っ越しとかが激しいのでつながりが深まらないよねみたいな、とか。あと、インターネットの普及で、そもそも人と直接会うことが少ないっていうふうに言われてるんですけど。僕が個人的に感じてるのが、これは若者の話になるんですけど。災害が起こると Twitter に集まるって言いませんか？分かります。Twitter やってる人は分かると思うんですけど。みんな災害が起こると、取りあえず Twitter に集まって、大丈夫かって言い合ってますよ。人間って、災害が起こると1人じゃ怖いところっていうのはあると思っ

た。災害の起こった後どうしていかっていうところは、1人だと限界があるというところで。自分たちの学校の周りでも、防災のイベントだったり避難訓練だったりってところで、家庭で、家族で来てくださってる人とか、実際、高齢者の方と子供、小学生だったり中学生が触れ合う姿を見て、「共助」できないって思ってるからできないのであって。そういうきっかけをつくってあげれば、きっと大切だっていうのはみんな思ってることだと思うので。そういうきっかけをつくっていかないといけないかなっていうふうに思いました。

●中野先生 若い人たちは、何かが起こると SNS 上に集まるっていうことですよ。でも、それって、本当に大変なときには、SNS 上で集まるっていうのは役に立ちそうですか。

●加藤さん SNS に集まろうという意味ではなくて。

どこか心の中に不安を抱えてるよねって部分で、「共助」の重要性っていうのが人間の本能的な部分にあらわれてるんじゃないかなっていうふうに思いました。

●中野先生 なるほど。どうでしょう長谷川君。「SNS」とまさに書いてくれましたね。

SNS は、まさに未来に向かう力として使っていくためにはどうすれば良さそうですか。

●長谷川さん 若い人たちは SNS 大好きやと思うんですけど。先ほど言ってくれたように、災害が起きても SNS に集まるというか。



舞子高等学校 長谷川さん

僕自身も、この前あった鳥取と島根の地震の際も、揺れを感じたときにまず SNS で確認。どこで地震が起きたのかっていうのは確認しました。

最初に池田さんがおっしゃったことで、防災に興味がない人はこういう場に集まらないって話があったんですけど、やっぱり防災に興味がない人も防災を目にする機会っていうのは、やっぱり SNS しかないんじゃないかなっていうふうに考えてて。

おすすめ欄に勝手に流れてくるような SNS が重要なんじゃないかなと考えてます。

●中野先生 まさに今日、奥村先生とも、これからバンバン SNS を使って、こういう場所をどうやって宣伝できるかというか、安心できるかを考えたいですねって話をしていたので、ぜひ長谷川さんも力を貸してください。

●長谷川さん SNS で。頑張ります。

●中野先生 そうやってバーチャル空間でのつながりっていうのも、すごいやっぱり精神的な助け合いにもなるし、実際、情報を伝えていく上ではすごい力になると思うんですよ。

それとはある意味対照的に、「クロスロード」ゲームっていうのは。福田さん、書いてくれましたが。まさに人と人とが同じ場所に集まって、顔を合わせて対面でやり合うと、そういうゲームだと思うんですけども。それをご提案されている、その心をぜひお話しいただければと。

パネルディスカッション

「クロスロード」ゲームとは何かということも、ぜひちょっとだけ。

- 福田氏 ちなみに学生の皆さん、防災「クロスロード」ゲームご存じですか。知ってる人。意外と少ないのかな。



神戸市職員 福田氏

この「クロスロード」ゲームっていうのは、阪神・淡路大震災のときに震災対応だった神戸市職員のインタビューを行いまして、そのインタビューの中から見えてきたもの。震災対応では非常に過酷な場面で難しい決断を迫られたと。そのときに生じるジレンマっていうのをもとにつくられたゲームです。基本的に、問題に対してイエスカノーで答える。

簡単に説明しますと、避難所に3千人の避難者がいると。2千食あります、配りますか。配る人はイエス、配らないならノーです。この問題にはいろんな判断の仕方があって。「クロスロード」って、イエスカノーで必ず答えるんですけど、イエスが必ず正解とかノーが必ず正解というわけではなくて、どちらを選んでも正解でもあるし、課題というか問題点があるというところで。この「クロスロード」をやり続けることによって、1回やるのではなしに何回も繰り返しやることでブラッシュアップできるしコミュニケーションも取れるし、いろんな気づきも得られる、いろんなことがあります。

私、実は神戸クロスロード研究会というところにおりまして、クロスロードの啓発とかをやっているんで、そういう面もあるんですけど。ちょっと宣伝にはなるんですけども。

この「クロスロード」を通して取り組んでいただくことで、全体の防災力っていうのも上がっていくし。防災だけじゃなしに、まさに皆さんのつながりですね。この「クロスロード」の意味が、まさに「人と人が出会う場所」という意味を持っておりまして。そういう意味でも、この「クロスロード」っていうのがすごく役に立つのではないかなという想いで書かせていただきました。

- 中野先生 まさに「クロスロード」ゲームでいろんな人たちが集まって、一つの問題に対して、私イエスだと思う、でもあなたはノーだと思う。何でなんだろうっていうふうに擦り合わせていくっていうプロセスがね、非常に災害のときはベストなアンサーを出したいんですけども、セカンドベスト、サードベスト、次善の策みたいなものをみんなで共感し合うというところが非常に大事になってくるわけですね。

なので、「共感」っていうキーワード、寺井さんも挙げてくれてるんですけども。この「共感」というのは、どういう「共感」を寺井さんは。

- 寺井氏 さっき、一番最初のセッションのときに「つながる」っていうふうに書いて。ほかにも「コミュニティ」とか、そういったつながるキーワードを出していただいた方がたくさんいたと思うんですけど。つながるためには、やっぱり、まずは「共感」してもらわないと仲間が増えていかないなと思ひまして、「共感」とさせていただきました。

何か良いなとか、楽しそうやなとか。SNSとかも、多分、「共感」してほしいからみんなあげてる。で、「共感」したらバズるみたいな。そんな仕組みだと思うんですけど。その「共感」を広げていくっていうことで、どんどん後世に残していけるんじゃないかなという想いです。

- 中野先生 ちなみに、30年前の震災の話聞いて、どういうところに共感できるところってありましたか。

- 寺井氏 今、「共感できるところありますか」って聞いていただいてありがとうございますっていう感じなんです



神戸学院大学 寺井氏

すが、あんまりないんですね、正直。ごめんなさい。30年前の教訓って、例えば、うーん、何だろうな。うーん。

今、防災イベントとかで紙でスリッパをつくってみるとか、紙食器をつくってみるとかあると思うんですけど。そもそも今って、新聞紙を見つけるのが難しかったりとか。ポスターって、そもそも身近にないよなっていうところがあると思うんですけど。そういうところで、今と30年前との教訓、じゃあ使えるものと使えないものがあるので、そういうところは「共感」できない部分のほうが私個人的には多いかなと思ひてしまっております。

- 中野先生 まさにそこをどうやって乗り越えていくかというところがこれから重要にもなってくると思うんです

パネルディスカッション

けども。

その中で、どうでしょう横山さん、「試す・やる」っていうのは、トライアンドエラーみたいなものをこれからやっていく必要があるってことなんですかね。

●横山氏 無謀にもここに上がってから書いてみようと思って。まとまらなかった結果でもあるんですけど。

いろんな仲間を増やす方法が、この30年間に重なってきたいろんな問いを未来に生かしていくみたいなきに、この方法でいけば良いみたいなのは、当然なかなか見つかるもんじゃないだろうなっていう意味で、もう小さなことでも何かちょっとずつ試してどんどん変わっていくしかないのかなというのが一つ思ったことと。

あとは、もう既にいろんなことを実践されてる人がここにこれだけ多様な実践が集まっているなというのも思ったので。「やる」って書いたのは、私はここに参加はしていますけれども、具体的に防災の活動を自分自身がやってるっていう感覚が全くなくて。そういうことをやってる人を広める手伝いとか、やってる人がもっと知られるように手伝うとか、そういう関わり方をずっとしてるなと思っていたので。なかなか、先ほど、「ハイタッチ」っていうキーワードもありましたけど、私自身が誰かに「ハイタッチ」する熱量を持ってないんじゃないかみたいなのもあって。熱意みたいなのを持つためには、やるしかやっぱないのかなみたいなことでも「やる」って書いてみたんですけど。気楽にやりたいう気持ちはあるし、宣言したくないみたいな弱気な気持ちももちろんあるので、「試す」という弱い書き方になっているっていう感じですね。

●中野先生 すごく「共感」を生んでますね、今のあたりには。

会場の中でもたくさんの笑いが起きていますが。

最後になりましたけども。西口さん、「おはよう防災」ですかね。

●西口氏 「おはよう」なんて。皆さん多分、朝起きたとき、家でね、家族と親とか。「おはよう」って言うときに、今日のおはようこう言おうとか、考えて言わないと思うんですよ。無意識に何も考えずに出るみたいな。何かそういうものとしての防災って何やろうって、すごく悩んでまして。それを、次の10年経ったときに何か見つけれたら良いなと個人的に思ってます。



ラジオ関西 西口氏

自分事よりももっと低い、無意識に何か、当たり前のように考えてないし振舞っているようなことができれば、すごく素敵なまちに神戸になるのかなというような。もしくは、自分の家族なのか会社なのか分からないですけど。会社で言えば、僕のラジオ局も、災害を知らない人が7割ですから。そういう中で、30年前こんなことやりましたやりましたばかり繰り返しても、多分、僕らは次の対応できないので。また変わっていくかなあかなっていうときに、何かそういう無意識の輪を。家とか、自分の住んでる町とか会社とか、何かそういうのを広げる10年間にしていきたいななんていう想いを込めました。

●中野先生 なるほど。

そして、もう終了時間に来ちゃったんですけども。ぜひ、会場の皆さんにも書いていただいたので、それをまたみんなできっせーの一で出して。右隣の人、左隣の人、ちょっと見えるようにしてみてください。

それではいきましょう、いっせーの一で、どん。

そうですね、たくさん出てますね。「ゲーム」とか「楽しい防災」それから「自ら動く」「まち歩き」「駅などの広告とかでも宣伝する」とかですね。「困って楽しく増える」。

「対人」とか「アイデアつながる」「地域を巻き込む」いろんなキーワードを出していただいています。

それで、ちょっと皆さんに、その心を聞く時間はなかなか持てないんですけども。もし差し支えなければ、その紙をぜひ置いていただければありがたいです。終わったら回収ボックスがありますので、回収ボックスにそっと入れといていただけるとうれしいです。

というのは、最初にも言いましたとおり、これは1年目の問いです。2年目、3年目、4年目、5年目と皆さん、そして皆さんの後輩とかも、きっとこの問いに接して、そのときそのときいろいろ考えてくれると思うんですよ。それを10年後にみんなでもたそれを見返してみても、ああ、10年間かけてこんなふうに変わってきたんだということが見えるようにできれば良いかなと思っています。

パネルディスカッション

そして、私が締める前に、南さんにもぜひ感想をいただきたいと思います。

- 南研究員 今日、多様な議論を聞いて大変楽しかったです。私が幾つか今日の皆さんのお話を聞いて感じたことなんですが。

まず一つ目は、多分、皆さんのアプローチ2種類あるかなと思って。しっかり考えて行動しようっていうタイプのメッセージを書いてくださった方と、どちらかという楽しく気楽にみんなを巻き込む形でやっていこうっていう考え方をしている方がいて。それ、多分、両方大事なのかなというふうに思って。しっかり普段考えているからこそ、続けられるような楽しい活動に昇華していけるんじゃないかっていうような。それが、今後10年、20年と続けていく秘訣になるのかなっていうのが、一つ感じました。

もう一つは、つながりの新しい形っていうのがいろいろ見えてきたのかなというふうに思いました。「コミュニティ」とか「共感」とか、つながり系のキーワードがいろいろ出てきたかと思うんですけど、今の特に若い人たちのつながり方って、従来の例えば地域のコミュニティとか会社とかそういう、学校とか、そういったところだけではなくて、SNS上でどんどんつながっていく。「縦型防災」っていうキーワードも、すごい面白いなと思って聞いていたんですけど。そういう現代的なつながり方、新しいコミュニティの形の中でどう伝えていくかっていうところを、皆さんとこれから10年、20年、議論していけると面白いのかなというふうに感じました。

- 中野先生 すごくしっかりまとめていたので、私はいいかなとも思うのですが。もうまさに南さんが言ってくれたとおりだと私も思いました。

というのは、30年前に大事だなと言われたこと。「つながり」大事だよ、「共助」大事だよ、あるいは、家を強くすることも大事だよっていうことは当然言われたわけですけども。

けど、例えば「共助」を一つ取っても、「共助」の仕方は、30年経って変わってきてますよね。30年前と同じコミュニティじゃないし、新しいツール、新しい場が生まれてきてる。その中で、じゃあ新しい場の中でどうやって「共助」をつくっていくのかっていうことは、これから30年後の新しい問いだと思いますし。でも、私は阪神・淡路大震災に根っこがあって、我々は同じ流れの中で生きてるんだっていうことも同時に感じた次第です。

ですので、今回、1年目のトライアルということで、この企画は10年続くことがもう決まっていますので。皆さんは既に一員ということで、ぜひ卒業しても、毎年やっていますので、ここで、10年間引き続き来てくれると、とてもうれしいです。

そして、ぜひ皆さんの様々な新しい取組とかもここに持ってきてもらって、紹介してもらって。そしてまた新しい人たちとつながって、次の防災を一緒につくっていけたら良いかなと思います。

- 奥村先生 中野先生も南さんも、どうもありがとうございます。



奥村委員長

あと、会場の皆さんもどうもありがとうございました。

この後、もう閉会の挨拶になってしまう。もう私が発言する機会がないので。このままいくと、本当に何となくまだ1年、基礎なので、ちょっと言っておきたかったですけれども。

防災をすることの難しさっていうことを共有することができたと思うんですけども、何か行動をしましょう、皆さん。何でもいい。「縦型防災」何かできたらいいやんって言った人。動くことが大事だってね、最初おっしゃっていただきましたよね。

動くこと大事なんです。誰かにやってって言われるのを待つのをやめませんか。もうどんなことでもいい。

何かやろう。この実行委員会は、一応、大人のメンバーでやってるんですよ。だけど、中学生の皆さんも高校の皆さんも大学の皆さんもウェルカムだし。それから、今日初めて参加したっていう人もウェルカムなんです。私が処理できるかどうかの問題だけです。いろんな「やらせてくれ」に対応できるかどうかは、もちろん限界があるかもしれないんですけど、私は皆さんの「やりたい」「やってみたい」という気持ちに全力で寄り添いたいと思っておりますし。私にいちいち関係なく、どんどん物事が動いていくようになったら「BEYOND」できると思うんですよ。



パネルディスカッション

「挨拶」の話とかも、いっぱいいいキーワードもらったんですけど、誰かを行動を変えるって難しいです。この「教育」とか「啓発」とかもいいですよ。だけど、その人にはその人なりにできない理由があるんです。誰かのことを理解しようともせず自分の考えを押しつけるのは無理です。

だから、どうすれば、でもその人のことを理解して、その人と一緒に妥協点を見出せるのかを考えられる愛情深い人にならないといけない。

●中野先生 「愛」、それもありましたね。「愛」ですね。

●奥村先生 高見さんからいっぱいキーワードも。

すっごいしょうもない話しますけど。マイク持ってしゃべってくださいっていうね。この前、研究会で私、委員会の委員長をしたときにね、オンラインの人いるから。今、ハイブリッドって、よくあるでしょ。マイク持ってしゃべってください。オンラインの人間こえないから。何回言っても、みんなね、熱量がこもるとね、ボードのほうへ行ってマイクと離れたとこへ行っちゃうんですよ。あかんと。やってくださいやってくださいはやれないと思ったので、そのスタンドをね、取ったんですよ。スタンドに挿さってるからあかんねや。ポンって置いたら、みんな持ちながらしゃべるから移動するときも持ちながら動いてくれるようになって、持ってくださって言わなくなったんですよ。言う必要がなくなったんですよ。

中野先生が書かれた論文に『ナッジ』という考え方が登場しますが、これも大切なキーワード。動かない人を、やらない人を、守るためにどうしたらいいかっていうときに、その人を変えようとし過ぎるアプローチをちょっと変えてみると、その人のことを助けることができるかもしれない。この「BEYOND30+」は、私たちいろいろやりたいんだけど、アイデアも能力も足りてない。皆さんの、何かやってみたい、自分も協力してみたいという気持ちとか行動が、もしかしたらこの活動を変えるかもしれないので、ぜひ動いてほしいなと思って。それだけ言いたかったんです。

中野先生、10年後、お金いっぱい集めてでっかいホテルでやりましょう。10年分の参加者を集めて。お金、どっから取りましょうかね。ちょっと後で相談するね。どっかの神戸の大きなホテル借りて、もう何千人入るようなところで。ね、こんなこと約束したらやばいけど。でも、言わないとやらなくなるから。やりましょうね、中野先生。

●中野先生 そうですね。はい。やりましょう。

●奥村先生 「縦型」も。それで、オンラインで中継してください。オンライン参加者向けに、どんどん動画が配信されてるみたいな。何かこう、10年後楽しみだなと思えるようになったらいいなと思ひまして。

●中野先生 ありがとうございます。

ということで、これでパネルディスカッションを締めたいと思います。

パネリストの皆さんも、どうもありがとうございました。

学生

きっかけ 気楽

巻き込む
楽しむ

駅などの広告で
防災について宣伝する

助け合い

絶やさない

つなげる

自信を

広がり合い

情熱

広げる

もつ

夕型防災

どんな

誰とも交流し、考える

自分ごと
として考える

人と時間

感謝

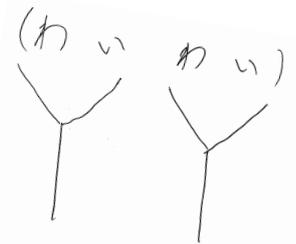
アットホーム 防災をする

スモールステップ

仲間

をつくる

つづける



被害が0

防災・復興を 楽しむ

すること

災害も0!

共有する、伝える

コミュニテ

客観的に

内から 日常から
外へ 全員へ

Among

みつめる

広

少しずつ

いつでも
どこでも
だれでも

防災を
め あたりまえに
る 文化に

~~時代は変わる~~

時代を変える

※これらは、BEYOND30+の1年目に記録された言葉である。※大切にしたい言葉(学生) 記入あり：32枚、白紙：0枚

に言葉

学生以外

しつこさ 感じ

共感 自分事 謝

楽しさ
没入

仲間と楽しむ
押しつら

楽しさに
つながる

想像力

自然とそうなる

カタチをつくる



活動に

もっと後さになつていく!!
と思う。

日頃の気づき スマイル

命をう?



ちょっとやる

身近な

ちょっと進める

つながって

人から

ついでに防災

何の目的は必要なのかな?
共感

人としての

温故知新
↓
動

困楽増

りごとを(かあて)

しく通じていくための
(やりかた・知識・人材...)
をいかに増やすか。

やしていく、
集めていく、

優しさ

敵を知り

己を知って

備えること

防災を日常に
溶け込ませる!

今あることを

みつけ

市民 協業 地域社会(コミュニティ)

自治 非営利性・公益性 ネットワーク 二重化

あまり力まないように

行動する

※これらは、BEYOND30+の1年目に記録された言葉である。※大切にしたい言葉(学生以外) 記入あり: 20 枚、白紙: 0 枚

学生

常に頭の片みに

開われる機会のあるときに積極的に参加する

レベルUP

だれかをおいいかない活動

まず、私から
あいさつを

みんなを

経馬券を

つなぐ活動

SNS

適在適所

共助

恐怖を覚えすぎずに、
自分たちの未来のために
少しづつ出し出していく。

楽しく学ぶための工夫(動画、ゲーム)

そこに愛はあるのか?

地域をまきこんで

自分が学んだ知識を身近な人から伝える

優しさは強さ

具体的に

少しずつ対策しつないていく

公園などの身近な場所に防災のための道具を設置する
今日

今を大切に

地域をまきこむ

災害・防災にかこ

?

関連づける

凡事徹底

リーダーとして

動くことが出来る人を増やす

防災と一見無関係な物事と結びつけて理解の第一歩に

意識徹底防災
人と変えるのではなく環境を変えろ
誰一人おこさない

交流する

災害について学び、考え
それを人に伝えることが

繰り返す、
繰り返さない!!

子供も楽しみながら
できる防災体験を心がける

ENJOY!

結果的に人として成長できる = 反省と改善

とりあえず調べる

まち歩き

世代を問わない

楽しく学べる

とりあえず参加する

恐怖を

楽しい防災

活動をする

現場「で」知る

覚えすぎない

ハイタッチ

ネットワーク

孝文館の中で防災を学ぶ
場所を増やす

得意分野から

防災をネットワーク

Aiの活用

防災目的でなくとも

参加できること

誰もが参加しやすい

いっしょに会話をします

楽しい防災イベント + α

※これらは、BEYOND30+の1年目に記録された言葉である。※BEYOND 宣言(学生) 記入あり: 45枚、白紙: 0枚

OND 宣言

学生
以外

良い事例を
参考に+αで
よりよくなる

原点
共感

楽しむ 試す・やる 毎日生きる
真髓を継承しながら

自ら動く 伝え方の変革! ボランティア

「孝子こと」 知恵
多様な意見を学びた女性
の活動を行う
積極的に参加する。

を継続する。文化 日頃から ~~特に小学生~~ ^{と関わる防災活動}
に反対する

肩肘

情報発信

素人の力 張らずに 「実行力」と

しろうと ちから 対人 「アイデア」を
つなげる

防災ツール
クロスロードを
やり続ける!

バカにしない
否定しない
タイプを気にしない

愚
又

※これらは、BEYOND30+の1年目に記録された言葉である。※BEYOND宣言(学生以外) 記入あり: 20枚、白紙: 1枚

閉会のあいさつ

BEYOND 30+ (メモリアル・コンファレンス・インKOBE)
企画実行委員会顧問
人と防災未来センター長 河田 恵昭



河田 恵昭 センター長

●河田センター長 初めまして、河田でございます。

まさか31回も挨拶するとは思っていませんでした。

阪神・淡路大震災が起こったときは、ここには神戸製鋼所の製鉄の機械があって、建物を含めて全部潰れちゃったんですね。震災が起こったときに、関係者が集まって何とかしなきゃいけないということで。そのとき、何の目標もありませんでした。ですけれども、何とかしなければいけないという人がたくさん集まったんですね。そして、資金もなかったんですね、実は。一銭もお金なかったんですよ。そのときに、「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」をつくって、関心のある人にみんな参加してもらおうって。どう

いう人が来てほしいじゃなくて、災害が起こって何とかしなきゃいけないと、そういう感想を持った人を集めてこれから活動しようよということを決めました。

そして、そのとき最初に合意したのは、「継続する」。この会議を継続する。それから、10年ごとにこの会議を運営する人も全員変えるって。それは、やはり最初に考えたことがずっとそのまま生きるなんていうようなことはおかしいので。時代が変わるといろんな考え方も変わっていくって。それに応じて組織っていうのは変えていかなきゃいけないと。そう考えて単純にやってまいりました。

ですから、31年前に阪神・淡路大震災が起こって、もう3カ月間、京都大学に行かずに毎日被災地をウロウロウロウロ口とったんですから。そういうことをやっぱり続けなきゃいけないって。何か災害が起こったから何かやるっていうんじゃない駄目だって。日頃からそれを考えておかないと、起こったときには役に立たないっていうことに気づいたんですね。ですから「継続は力なり」という言葉は確かです。続けないと力にはならないっていう。この31年間の活動は、はっきり申し上げて、政府にも伝わっているんです。ですから、先ほど申し上げましたように、防災庁をつくれっていうのは、ずっと言ってたんです。

副センター長が言っておりましたように、みんなを脅かしてですね。日本は潰れるぞ潰れるぞということを行いながらやってきました。でも、潰れたらいいなんて思ったことはないんですよ。潰れたら困るから強いことを言ってたんですね。ですから、それがこういう「人と防災未来センター」という素晴らしい建物ができて、素晴らしい人たちが集まっていたら、もう二十数年活動しているって、全国でここだけなんですよ。災害の後、これだけ長くいろんな形でみんなの意見を汲み上げてるのは。そういう活動がやっぱり価値があるっていうのが分かってきたっていうのは、やっぱり社会が非常に成熟してきているってということなんですよ。

この31年間、私ども震災に直面して、被災地に来たときに、どうしようって。どうしたらいいんだっていう答えは、全然ありませんでした。ですから、復旧・復興をどうするかなんていうイメージも全くありませんでした。ですけれども、そのときみんなが考えたことを継続してやるっていう合意がここまで来ているわけでありまして。

ですから、先ほどご紹介ありましたように、40回目には、大きなホテルでみんなで美味しいものを食べながら、やってきてよかったねって、もっとやろうねっていう形にしていきたいと思っています。

今日は、どうもありがとうございました。

アンケート結果

1月10日(土) BEYOND30+2026 に関するアンケート結果

(回答数 11 件)

1. 所属を教えてください

企画実行委員	4名
高校生	1名
高専生	1名
大学生	4名
社会人	1名



2. イベントに参加した理由をお聞かせください (自由記載)

- ・ 昨年から関わっているため
- ・ 毎年参加しているから
- ・ 自身の活動共有とこれからの防災を考えるための知見を増やすため
- ・ 昨年までのメモリアルアクション KOBE とどう違うのか知りたかったから
- ・ 普段から防災を学んでいるのですが、このイベントが楽しかったので、もっといろんな知識をつけようと思いました
- ・ KiDS の活動を広めるだけでなく、様々な団体からの学びを得るため
- ・ 企画実行委員として、最初のイベント、これからの 10 年をどのようにしていくのか、参加者の皆さんと一緒に考えていくため
- ・ グループの紹介及び活動内容と今年からの新しい取り組みの紹介
- ・ 母からイベントの話をして、EC3 の活動としても良い経験となると思ったので、部員らと参加させてもらいました
- ・ メモリアルという舞台上で、防災や社会に何か新しい動きを生み出せそうだから
- ・ 様々な防災関係の方に出会えると思ったから

アンケート結果

3. イベントで良かった点をお聞かせください (自由記述)

- ・他団体と関わる場面が多かったこと
- ・ポスターセッション形式で、来場者と発表者が直接話すことができてよかった
- ・パネルディスカッションで登壇者以外にも意見を聞いたことで、様々な考えを知ることができた
- ・まさかの来場者参加型パネルディスカッション、そしてポスターセッション (は、来年は東館の兵庫県立大学の階を会場にするのも良いかも！)
- ・パネルディスカッションのときに1人1人の自分がなぜその言葉にしたかを詳しく知ることができてよかったです
- ・交流できたこと
- ・奥村先生のお話、熱い想いを会場の皆さんと共有できた。10年後は立派なホテルで開催するという目標。若手と大人と一緒に登壇したパネルディスカッション、若者の意見がいろいろと聞けて斬新だった。また、大人の意見との比較も良かったと思う。最後の河田先生の挨拶、10年後は美味しいご馳走付きで。夢はでっかくないといけない、と学んだ (笑)
- ・グループの担当者としては代表の体調不良で急遽パネリストとして登壇した中学生が緊張しながらもよく頑張ってくれたこと。中学校の発表があったこと
- ・普段の活動では特定の人との活動が多いので、このイベントでは普段関わらない団体さんと交流し、意見交換する良い機会になりました
- ・参加されているみなさんから前向きな雰囲気を感じられたこと
- ・全てがスムーズで色々な活動の話が聞けた点

4. ワークショップで印象に残った言葉やフレーズを書いてください (自由記述)

- ・気楽にやるという言葉が何度も飛び交っていましたが、本当にその通りで、肩肘はらずに自分のやれることをやっていけば良いのです。それが集まれば、自ずとそれが皆の防災になっていくと思います
- ・「口に出したことはどんなことでも良いから挑戦しよう」という言葉を聞いたことで今後の活動の意欲が増しました
- ・未来に向かうという趣旨がよく伝わってきました
- ・ハイタッチ
- ・防災は愛
- ・タテ型防災 だれもおいていかない
- ・感謝・愛
- ・タテ型防災と愛
- ・特にありません
- ・タテ型動画、タテ型防災、潮目が変わった
- ・仲間集めが大切



アンケート結果

5. イベントへのご意見やご感想、今後期待することをお聞かせください（自由記述）

- ・毎年のように開催してもらいたいです
- ・参加団体が企画委員が所属する団体に限らず、門戸を広げることができるといい
- ・参加者・活動者・団体の簡単な紹介をした上で議論を重ねることで、新たな人脈が増えやすくなる
- ・メモリアルという言葉を外したことにより、これからを考えよう！というメッセージが伝わりやすいと感じました。今、大人気の「ウマ娘シンデレラグレイ」の場面を上手く使って、人と防災未来センターと集英社、サイゲームスが協力し合って防災 LINE スタンプを作れないか一度ご検討願えないでしょうか。午年の今年が最大のチャンスだと思います。河田センター長はじめ、「BEYOND30+」実行委員会の皆さまに、より多くの人に防災に興味を持ってもらえるアイデアの1つとしてご紹介させていただきました。私に余裕があるときに、出来るだけ早い時期にまたアイデアをお伝えできればと思います
- ・10年後が楽しみです！
- ・もう少し長く交流する時間を取って欲しい。ステージ上で発表する時間を設けて欲しい
- ・来年以降が楽しみであり、気を引き締めてのぞみたい。30年の問いを考え続けたい
- ・パネリストの人数が多すぎたこととパネルディスカッションの割にはパネリストが受身で進行役からの問いに答えるだけだったのが残念でした。パネリスト間のやり取りも必要です。またパネリストから出たフレーズ等でこれまでの災害時に問題となっていたことが「大事」ということで片付けられて「リスク」について進行役が語らなかったのは問題だと思います。災害時に SNS を情報として扱うべきかどうかという議論もあってよかったはずですが。パネリストから SNS が被災者の心の支えになるような発言もありましたが私はそうは思いません。今後のことですが、今回についてはまだスタートしたばかりで中途半端な内容になるのはしかたがないと思いますが、BEYOND30+ が今後どのような方向で最終的に何をを目指すのかを明確に進めていく必要があると感じました
- ・普段聞かないような情報を意見交換の時に知れたけど、時間の都合上、意見交換できなかったグループもあったので、今回は意見交換のグループは a、b グループの 2 グループだけでしたが、3 グループに分けてもっと多くの団体さんの意見が聞けたらより良いなと思いました
- ・阪神・淡路大震災からの 30 余年をもっと知りたい。そして、それを多くの方々の未来を歩む力に変えていけるように知恵を絞るとともに、自らも行動していきたい
- ・お菓子とジュースでも、懇親会があれば嬉しい

6. ワークショップの満足度（5段階評価）

満足度 5	3 人
満足度 4	6 人
満足度 3	1 人
満足度 2	1 人

7. 次回も参加したいと感じましたか？

はい	11 人
いいえ	0 人



30年を超え紡いできた問いを、未来へ向かうチカラに

Memorial
Conference
in KOBE

BEYOND30+ | 2026

2026.1.10 (土) 13:00~16:00

📍 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 西館1階 ガイダンスルーム

1996年に始まった「Memorial Conference in KOBE」は、被災者自身が経験から教訓をくみ取り、世界へ、そして未来へ届ける場でした。2006年には世代間の語り合いへ、2016年からは未災者による自由なアクションへと広がり、KOBEのメモリアルは時代とともに進化してきました。

いま、震災から三十余年を迎え、私たちが向き合うべきは震災当時の記憶ではなく、現在に至る歩みや変化、そしてその過程で紡がれてきた問いの数々です。

「BEYOND30+」は、「世界へ、未来へ」の思いや「未来を担う人びとによるアクション」など、これまでのメモリアルの精神を継承しながら、未来への問いや挑戦を創り出すことに力点を置く、これまでにない新しいメモリアル行事です。この行事は、三十余年を超えて紡がれてきた問いを見つめ直し、語り継ぎを超え、私たち自身をも超えていく、未来へ向かうチカラを生み出す場なのです。

主催：人と防災未来センター、京都大学防災研究所、関西大学社会安全学部

共催：自然災害研究協議会近畿地区部会

企画：BEYOND30+ (メモリアル・コンファレンス・インKOBE) 企画実行委員会

お問い合わせ：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 普及課 Tel：078-262-5066 Fax：078-262-5082

本研究はJSPS科研費JP24K00327の助成を受けたものです。

13:00	開会挨拶 BEYOND30+ 企画実行委員会 委員長 関西大学 社会安全学部 教授 奥村 与志弘
13:05	企画趣旨説明 BEYOND30+ 企画実行委員会 委員長 関西大学 社会安全学部 教授 奥村 与志弘
13:25	活動紹介セッション
14:25	休憩
14:35	パネルディスカッション 「BEYOND30+ を考える(仮)」 (コーディネーター) BEYOND30+ 企画実行委員会 副委員長 京都大学防災研究所 巨大災害研究センター 准教授 中野 元太 (パネリスト) 企画実行委員・学生等
15:55	講評・閉会挨拶 BEYOND30+ 企画実行委員会 顧問 人と防災未来センター長 河田 恵昭



メモリアル・コンファレンス・インKOBЕ 企画実行委員会 名簿

【企画実行委員等】

※令和8年1月10日現在

※委員は氏名五十音順

役 職	氏 名	所 属
委員長	奥 村 与志弘	関西大学社会安全学部
副委員長	中 野 元 太	京都大学防災研究所
委 員	伊 藤 奈緒子	株式会社G K 京都
	卜 部 兼 慎	NPO法人防災デザイン研究会 (株式会社GK京都)
	大 山 武 人	NHK大阪放送局
	佐 伯 琢 磨	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	鈴 木 あかね	兵庫県立舞子高等学校環境防災科
	高 橋 徹	NPO法人TEAM・あげあげ
	寺 井 美 紀	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	名 倉 剛 志	株式会社G K 京都第2 デザイン部
	西 口 正 史	ラジオ関西ビジネスソリューション局
	福 岡 龍 史	(株)エフエム・プランニング
	福 田 敬 正	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	福 田 秀 志	兵庫県立尼崎小田高等学校
	松 川 杏 寧	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	本 塚 智 貴	国立明石工業高等専門学校
横 山 愛 子	株式会社G K 京都第2 デザイン部	
顧 問	河 田 恵 昭	人と防災未来センター長、関西大学社会安全学部特別任命教授
	矢 守 克 也	京都大学防災研究所
	牧 紀 男	京都大学防災研究所
事務局	高 見 隆	人と防災未来センター副センター長
	島 田 三津起	事業部長
	森 本 昌	研究部長
	川 口 奈緒美	普及課長
	長谷川 由 美	普及課課長補佐 (事務担当)
	南 貴 久	研究員 (研究部主担当)
	松 村 圭 悟	研究員
	黒 田 奈 那	研究員

当日の写真



1月10日(土)
BEYOND30+大交流会の様子





会場：左側



会場：中央



会場：右側



Memorial Conference in KOBE

BEYOND30+ | 2026

令和7年度 BEYOND30+ 報告書

主催：人と防災未来センター

京都大学防災研究所、関西大学社会安全学部

共催：自然災害研究協議会近畿地区部会

企画：BEYOND 30+（メモリアル・コンファレンス・イン KOBE）

企画実行委員会

人と防災未来センター 事業部普及課内

BEYOND 30+（メモリアル・コンファレンス・イン KOBE）

企画実行委員会

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2 西館6階

Tel: 078-262-5066

<https://www.dri.ne.jp/research/community/beyond30plus/>

本研究はJSPS科研費JP24K00327の助成を受けたものです。